

# 榎田遺跡

(甲府市千塚4丁目 3256-1 他地点)

—都市計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2016

山梨県中北建設事務所  
甲府市教育委員会  
昭和測量株式会社



# 榎田遺跡

(甲府市千塚4丁目 3256-1 他地点)

—都市計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2016

山梨県中北建設事務所  
甲府市教育委員会  
昭和測量株式会社



## 序

山梨県のほぼ中央に位置する甲府盆地は、世界文化遺産となりました富士山や、国内第2位の高峰である南アルプスの北岳など標高三千m級の山々が四方を囲み、日本三大急流の一つである富士川が南流する山紫水明の地です。

戦国時代の永正16年（1519）、武田信虎が盆地北辺に位置する躑躅が崎の地に館を構えて以来、甲斐の府中であった甲府市は、山梨県における政治・文化の中心として発展し、平成31年には開府500年を迎えます。市内には約1万年前の旧石器時代の遺跡が発見されるなど、悠久の歴史を物語る土地であります。

今回、発掘調査を実施した榎田遺跡周辺は、古くから千塚と呼ばれ、古墳時代後期の古墳が多く築かれました。現在も県指定史跡の加牟那塚古墳・万寿森古墳が残り、往時をしのばせます。調査地点の南西には、甲斐源氏の一族である跡部信秋の再建と伝えられる遊月山攀桂寺（はんけいじ）が存在し、一帯は古墳時代から中世にわたる多くの遺跡が集中しております。今回の発掘調査においても、主に古墳時代と戦国時代の遺構・遺物が検出されました。

今後、これらの歴史資料が、開府500年を迎える甲府市の歴史解明の一助となるとともに、生涯学習や今後のまちづくりを考える上で活用され、地域の歴史文化を再認識する機会の創出となれば幸いです。

末筆になりましたが、発掘調査にあたり御指導、御協力を賜りました関係者並びに関係機関に、厚く御礼申し上げます。

平成28年12月

甲府市教育委員会  
教育長 長谷川義高



## 例 言

1. 本報告書は、山梨県甲府市千塚4丁目3256-1他に所在する榎田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査であり、甲府市教育委員会が実施し、昭和測量株式会社がこれを支援した。
3. 本調査は、甲府市教育委員会生涯学習文化課の平塚洋一が担当し、昭和測量株式会社の小谷亮二・萩野谷主税が現地調査及び整理事業の支援をおこなった。
4. 本調査に係る経費等は、事業主である山梨県中北建設事務所がすべて負担した。
5. 発掘調査は平成27年6月10日～8月7日にかけて実施し、整理・報告書刊行業務は平成28年7月19日～平成28年12月22日まで実施した。
6. 発掘調査および本報告書の執筆は、  
第1章 調査に至る経緯を平塚洋一（甲府市教育委員会）が担当し、第2章から第7章と全体の編集を小谷亮二・萩野谷主税（昭和測量株式会社）が担当した。  
現場調査および整理作業にあたっては新津健（昭和測量株式会社）の助言を受けた。  
遺物の実測は、上島光子、小澤美幸、齊藤里美、佐野香織、藤原由香、三木一恵、渡辺麗子、トレスは小澤、三木が行った。遺物写真は小谷が撮影を行った。
7. 哺乳類遺体（人骨）鑑定は株式会社パレオ・ラボ、馬の歯の放射性炭素年代測定は株式会社加速器分析研究所に依頼した。
8. 発掘調査および遺物の整理においては次の方々に御指導と御協力を賜った。感謝の意を表したい。（順不動、敬称略）  
小林健二 石神孝子
9. 調査体制  
調査員：小谷亮二・萩野谷主税（昭和測量株式会社）  
発掘調査参加者：原田隆邦 宮原雄二  
整理作業担当者：小谷亮二  
整理作業参加者：上島光子 小澤美幸 齊藤里美 佐野香織 藤原由香 三木一恵 渡辺麗子
10. 本報告書で使用地図は、国土地理院発行の「甲府」（1:25000）を使用した。
11. 遺跡における X、Y 座標は世界測地系座標を使用している。
12. 本調査における図面・写真・遺物はすべて甲府市教育委員会で保管している。

## 凡 例

1. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各挿図中に記載した。
2. 写真図版の縮尺は任意である。
3. 水系レベルの数字は海拔高を示し、単位はメートル (m) である。
4. 土層断面、遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖 1990 年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 榎田遺跡の過去の調査	6
第3章 調査の方法	8
第4章 調査の概要	
第1節 検出状況	8
第2節 土層断面	8
第5章 検出遺構	
第1節 竪穴状遺構	9
第2節 溝状遺構	9
第3節 土壇墓・土坑	9
第4節 ビット	11
第6章 出土した遺物	27
第7章 まとめ	30
引用・参考文献	37
第8章 自然科学分析	
第1節 榎田遺跡から出土した哺乳類遺体	38
第2節 榎田遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）および炭素・窒素安定同位体分析	39

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図（『国土地理院撮影の空中写真（1980年撮影）』）	2
第2図 周辺の遺跡分布図	4
第3図 調査地点図（『山梨県史』より）	6
第4図 調査地点図（『甲府市内遺跡Ⅲ』より）	6
第5図 調査地点図（『榎田遺跡』「公益財団法人山梨文化財研究所2016」より）	7
第6図 遺構分布図	13
第7図 調査区（Ⅰ・Ⅱ区）の土層断面	14
第8図 調査区（Ⅲ・Ⅳ区）の土層断面	15
第9図 1号竪穴状遺構（S11）・16号土坑（SK16）・82号ビット（SP82）	16
第10図 2号竪穴状遺構（S12）・11号土坑（SK11）・60号ビット（SP60）	16
第11図 1号溝状遺構（SD1）	17
第12図 2号溝状遺構（SD2）	17
第13図 3号溝状遺構（SD3）	17
第14図 4・5号溝状遺構（SD4・SD5）	18
第15図 1号土坑（SK1）	19



第16図	2号土坑 (SK2)	19
第17図	3号土坑 (SK3)	19
第18図	4号土坑 (SK4)	20
第19図	5号土坑 (SK5)	20
第20図	6・7号土坑 (SK6・SK7)	20
第21図	8・17号土坑 (SK8・SK17)	21
第22図	8号土坑 (土城墓) 人骨・遺物出土状況	21
第23図	9号土坑 (SK9)	22
第24図	10号土坑 (SK10)	22
第25図	11号土坑 (SK11)	22
第26図	12号土坑 (SK12)	22
第27図	13・15号土坑 (SK13・SK15)	23
第28図	14号土坑 (SK14)	23
第29図	ピット (1)	24
第30図	ピット (2)	25
第31図	ピット (3)	26
第32図	遺物出土分布図	27
第33図	遺物実測図 (1)	31
第34図	遺物実測図 (2)	32
第35図	遺物実測図 (3)	33

## 表目次

表1	周辺の遺跡地名表	5
表2	土坑計測表	10
表3	ピット計測表 (1)	11
表4	ピット計測表 (2)	12
表5	遺物観察表 (1)	34
表6	遺物観察表 (2)	35
表7	遺物観察表 (3)	36

## 写真図版目次

### 写真図版1

- I区全景 (南から)
- II区全景 (北から)

### 写真図版2

- III区全景 (北東から)
- IV区全景 (南から)

### 写真図版3

- I区東壁 (北西から)

- I区西壁 (南東から)

- II区東壁北側 (西から)
- II区東壁南側 (西から)

### 写真図版4

- II区西壁北側下層 (東から)
- II区西壁南側 (東から)
- III区北壁 (南から)
- III区東壁 (西から)

**写真図版5**

- 13. III区西壁(東から)
- 14. IV区東壁(西から)
- 15. IV区西壁(東から)

**写真図版6**

- 16. 1号竪穴状遺構南壁セクション(南から)
- 17. 1号竪穴状遺構・16号土坑(東から)
- 18. 1号竪穴状遺構遺物出土状況1(南東から)
- 19. 1号竪穴状遺構遺物出土状況2(西から)
- 20. 2号竪穴状遺構検出状況(西から)
- 21. 2号竪穴状遺構北壁セクション(北から)
- 22. 2号竪穴状遺構東壁セクション(東から)
- 23. 2号竪穴状遺構(西から)

**写真図版7**

- 24. 1号溝状遺構東壁セクション(南西から)
- 25. 1号溝状遺構ベルトセクション(南西から)
- 26. 1号溝状遺構(南から)

**写真図版8**

- 27. 4号溝状遺構東壁セクション1(南西から)
- 28. 4号溝状遺構東壁セクション2(西から)
- 29. 4号溝状遺構南側ベルトセクション(北東から)
- 30. 5号溝状遺構南壁セクション(南から)
- 31. 4号溝状遺構上層遺物出土状況(南西から)
- 32. 4号溝状遺構馬歯出土状況(攪乱)(東から)
- 33. 4号溝状遺構遺物出土状況1(西から)

**写真図版9**

- 34. 4号溝状遺構遺物出土状況2(南西から)
- 35. 4・5号溝状遺構(南西から)

**写真図版10**

- 36. 4号溝状遺構(南東から)
- 37. 4号溝状遺構南側(西から)

**写真図版11**

- 38. 1号土坑東ベルト西壁セクション(西から)
- 39. 1号土坑西壁セクション(東から)
- 40. 4号土坑セクション(北から)
- 41. 4号土坑土器出土状況(北から)
- 42. 4号土坑(南東から)
- 43. 8号土坑セクション(南東から)
- 44. 9号土坑周辺遺物出土状況(西から)
- 45. 10号土坑遺物出土状況(東から)

**写真図版12**

- 46. 8号土坑人骨・土器・銭出土状況1(南西から)
- 47. 8号土坑人骨・土器・銭出土状況2(拡大)(南西から)

**写真図版13**

- 48. 8号土坑人骨・土器・銭出土状況3(北東から)
- 49. 12号土坑(南から)
- 50. 13号土坑セクション(南東から)
- 51. 13号土坑(北西から)
- 52. 14号土坑(北東から)

**写真図版14**

- 53. 1号ピットセクション(西から)
- 54. 1号ピット(西から)
- 55. 4号ピットセクション(南から)
- 56. 7号ピットセクション(南から)
- 57. 11号ピットセクション(東から)
- 58. 25号ピットセクション(西から)
- 59. 25号ピット(南から)
- 60. 34・35号ピットセクション(東から)

**写真図版15**

- 61. 64号ピット(南から)
- 62. 68号ピット(北から)
- 63. 70号ピット(東から)
- 64. 77号ピット(東から)
- 65. 78号ピット(南から)
- 66. 79号ピット(北から)
- 67. 80号ピット(北から)
- 68. 83号ピット(南から)

**写真図版16**

- 遺物写真(1)

**写真図版17**

- 遺物写真(2)

**写真図版18**

- 遺物写真(3)

## 第1章 調査に至る経緯

山梨県中北建設事務所により都市計画道路高畑町昇仙峡線の拡幅工事が計画され、平成25年度から随時試掘調査を実施して、場所によっては本発掘調査を実施している。平成26年11月12日、中北建設事務所から依頼を受け試掘調査を実施した。その結果、千塚4丁目3256-1地点から平安時代の土器とともに方形の掘り込みが確認できた。

平成27年4月9日付け中北建第580号により「埋蔵文化財発掘の通知」の提出を受けた。前述したとおり、工事の予定地点には埋蔵文化財が良好に保存されているため、平成27年4月27日付け教学文第417号で山梨県教育委員会から、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」により工事の着手前に、本発掘調査を実施するよう指導があった。

指導に基づき、甲府市教育委員会が調査機関を組織し、平成27年6月10日から本発掘調査に着手した。

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

調査区は甲府市千塚4丁目3256-1他に位置する(第1図)。調査地点の地形に大きな影響を与えている荒川は、金峰山を源とし調査区の西側を南東方向に流下し笛吹川と合流する。

調査地点は、荒川と並行するように北西-南東方向に傾斜して微高地が発達しており、本遺跡もこのような微高地上に立地している。標高は299.0m～300.0mを測る。

また、荒川は名前のごとく大きく流路の変動や氾濫を繰り返し、その痕跡は今回の限定された範囲の調査区内でも確認できる。

### 第2節 歴史的環境

盆地の北から東に位置する山裾から扇状地にかけては、縄文時代～近世に至るまでの遺跡が分布し、扇状地上から沖積地にかけては弥生時代～古墳時代、平安時代、中世に至る遺跡が分布している。なお、本地域は、金峰山信仰に関わる「御嶽道」が走っている重要な箇所である。荒川を渡った甲斐市側には「亀沢口」ルート、千塚側には「吉沢口」ルートが通り、それぞれ北上して御嶽金桜神社から金峰山に至っている。今回の調査地区は、この「吉沢口」ルートに近接しており、中近世の遺構の検討も課題となる。

周辺の主な遺跡を紹介する(第2図)。

#### 縄文時代

15音羽遺跡からは縄文時代前期・中期・後期の土器・石器が出土している。42緑が丘二丁目遺跡からは平成6年の調査において、遺構は検出されなかったが縄文時代中期中葉から後葉を中心とした土器が出土し、黒曜石・鉄石英・粘板岩といった石材も出土している。同年第5次調査では、縄文時代中期の曽利式土器が出土した。縄文時代の集落跡が展開した事も想定される。43緑が丘一丁目遺跡からは平成4年に行われた試掘調査の結果、縄文時代の土器の底部片と黒曜石片1点が出土した。土器片は縄文時代中期初頭あるいは前葉のものとして推測される。47宝町遺跡からは縄文時代前期後葉の諸磯a式土器が出土した。



第1図 遺跡位置図 (「国土地理院撮影の空中写真 (1980年撮影)」)

## 弥生時代

甲府盆地の荒川周辺の自然堤防、扇状地上に遺跡は分布している。

15 音羽遺跡からは弥生時代後期の住居跡、焼土跡、溝状遺構、土坑が検出され、土器、磨製石鏃、土製紡錘車が出土している。42 緑が丘二丁目遺跡からは平成6年6次調査で手捏土器が出土しており祭祀的要素が考えられる。7次調査では弥生時代後期末葉から古墳時代前期前葉を中心とした土器が出土した。弥生時代の土器は赤彩が塗布されている。その祖形は菊川式土器に求められる。4世紀後葉から5世紀前葉頃が考えられる。44 塩部遺跡からは平成7年の調査において、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓11基、弥生時代後期の住居址1軒が、平成13～16年の調査では弥生時代後期～古墳時代後期の住居址45軒、掘立柱建物跡27棟の他、古墳時代前期の方形周溝墓4基が検出された。

## 古墳時代

遺跡の分布は、盆地の北および東に位置する丘陵上に集中しているが、扇状地上では、弥生時代から古墳時代、もしくはそれ以降の時代の遺構が検出される複合遺跡が多い。

7 跡部遺跡は平成22年の試掘調査で円筒埴輪片が出土している。12 加那塚古墳は昭和45年に石室入口部修理に伴い墳丘・石室の測量調査が行われた。その結果、直径40～45m、高さ7m程の円墳で周囲に周溝が巡ると推測される。高さは削平された可能性がある。内部主体は南に開口する右片袖型横穴式石室である。石室の規模は本県第2位の規模を誇る。副葬品は、須恵器、ガラス製丸玉が確認されている。須恵器の蓋は6世紀後半の時期のもので、この頃に築造されたと思われる。かつて神獸鏡、盤龍鏡、麗龍鏡などが出土したとされている。平成21年には円筒埴輪・形象埴輪が出土している。県指定史跡である。14 八幡東遺跡からは平成11年の試掘調査で古墳時代～平安時代の破片約55点が出土している。15 音羽遺跡からは平成4～5、7～8年の調査で住居跡、溝状遺構、土坑が検出され土器・石器が出土した。平成15年の調査では竪穴式住居跡が13棟確認された。出土遺物から古墳時代中期から後期の住居と思われる。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・土製品が出土している。37 万寿森古墳は、現存する墳丘の規模は直径約25m、墳丘下端から墳頂までの高さは約7m。主体部は南に開口する両袖型の横穴式石室である。副葬品の出土は知られていない。平成18年の調査において周溝が確認され、出土した遺物から6世紀第2四半期の年代が想定できる。県指定史跡である。湯村山古墳群東支群（30 湯村山6号墳・32 湯村山5号墳・33 湯村山4号墳・34 湯村山3号墳・35 湯村山2号墳・36 湯村山1号墳）はすべて円墳で1号墳は唯一積石塚である。遺物は6号墳の石室から直刀1振（両関撫角式の平棟平造で全長64.7cm）、金環1個が採集されている。西支群（28 大平1号墳・29 大平2号墳他）の大平1号墳は円墳と思われる。1・2号墳共に南に開口する右片袖型の横穴式石室である。遺物は知られていない。38 永井遺跡からは平成9年の調査において古墳時代～平安時代の土器が出土している。44 塩部遺跡からは古墳時代前期の集落、方形周溝墓が検出された。このことから甲府盆地北部における一勢力圏を形成していたと思われる。23 富士見遺跡からは古墳時代前期の水田跡が検出された。

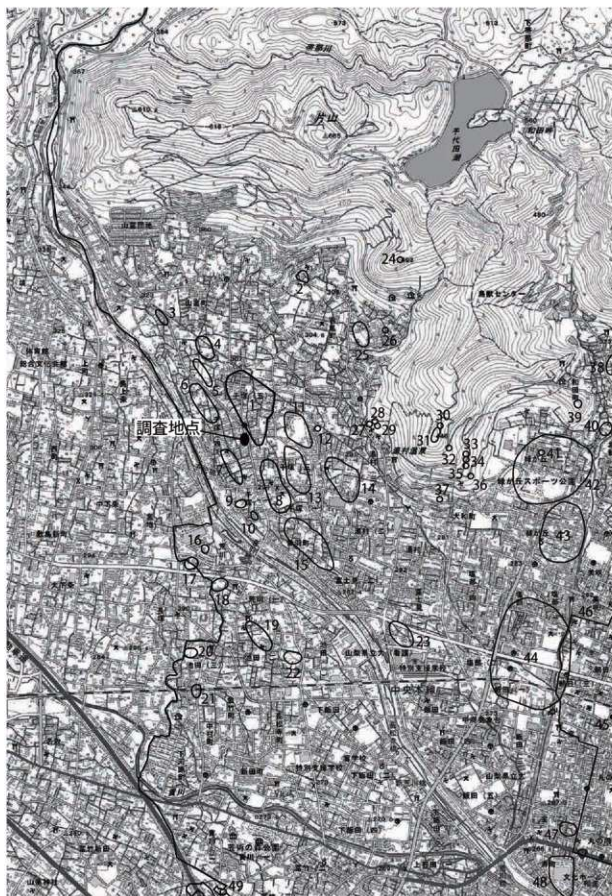
## 奈良・平安時代

甲府盆地の丘陵縁辺部から扇状地（低位段丘）に至るまで分布している。

15 音羽遺跡からは1・2次調査で奈良時代の住居跡、古墳時代～奈良時代もしくはそれ以降と思われる方形竪穴状遺構、土坑、溝状遺構、礎石が検出された。遺物は土師器、須恵器、石製の錘や灰釉の長頸壺他が出土している。44 塩部遺跡からは平成7年の調査において、奈良・平安時代の住居址8棟が検出された。

## 中世

7 跡部遺跡は中世の有力土豪である跡部伊賀守信秋の屋敷の伝承地とされる曹洞宗攀桂寺がある。平



S=1/25000

第2図 周辺の遺跡分布図

表1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別
1	榎田遺跡	弥生～平安	集落跡
2	若宮前遺跡	平安	散布地
3	鴨塚遺跡	平安	散布地
4	御蔵遺跡	古墳・平安	散布地
5	天神北遺跡	古墳・平安	散布地
6	天神西遺跡	古墳	散布地
7	跡部遺跡	古墳	散布地
8	塚本遺跡	古墳	散布地
9	西大坂 A 遺跡	縄文	散布地
10	西大坂 B 遺跡	平安	散布地
11	金塚西遺跡	縄文・古墳	散布地
12	加牟那塚古墳	古墳	古墳
13	神田遺跡	弥生～平安	散布地
14	八幡東遺跡	弥生・古墳	散布地
15	音羽遺跡	弥生・古墳	散布地
16	穴塚	古墳	古墳
17	西河原遺跡	縄文・平安	散布地
18	平石遺跡	平安	散布地
19	居村村上遺跡	縄文・平安	散布地
20	前田遺跡	中世	散布地
21	豆田遺跡	平安	散布地
22	前田遺跡	平安	城館跡
23	富士見遺跡	古墳・平安	散布地
24	天狗山古墳	古墳	古墳
25	天神平遺跡	平安	散布地
26	羽黒無名墳	古墳	古墳
27	塩沢寺裏無名墳	古墳	古墳
28	大平1号墳	古墳	古墳
29	大平2号墳	古墳	古墳
30	湯村山6号墳	古墳	古墳
31	湯村山城跡	中世	城館跡
32	湯村山5号墳	古墳	古墳
33	湯村山4号墳	古墳	古墳
34	湯村山3号墳	古墳	古墳
35	湯村山2号墳	古墳	古墳
36	湯村山1号墳	古墳	古墳
37	万寿森古墳	古墳	古墳
38	永井遺跡	古墳・平安	散布地
39	三光寺山遺跡	古墳	古墳
40	村之内遺跡	古墳・平安	散布地
41	和田無名墳	古墳	古墳
42	緑が丘二丁目遺跡	古墳～平安	古墳
43	緑が丘一丁目遺跡	古墳	散布地
44	塩部遺跡	弥生～平安	包蔵地
45	甲府城跡	近世	城館跡
46	甲府城下町遺跡	近世	集落跡
47	宝町遺跡	縄文・平安	包蔵地
48	寿町遺跡	古墳～	包蔵地
49	南河原 A 遺跡	平安～	散布地

成 22 年に試掘調査が行われた。報告によると中世の居館に敷設された郭に関連する土塁に伴う集石群が検出されている。遺物はかわらけや天目茶碗、青磁、播鉢、常滑焼の甕等 15 世紀代の遺物が出土している。42 畝が丘二丁目遺跡からは平成 6 年の第 3 次調査で人骨が検出された。人骨は屈葬で中世の土坑墓と想定される。遺跡の北に位置する法泉寺に關係する墓地の一つの可能性がある。

近世

48 寿町遺跡では江戸時代には甲州街道が区域内を東西に貫通しており、街道沿いには飯田新町などの町屋が存在していた。昭和 62 年の試掘調査では江戸期以降の敷石と遺物が出土している。

### 第3節 榎田遺跡の過去の調査

これまで山梨県埋蔵文化財センター、甲府市、公益財団法人山梨文化財研究所により行われた主な調査結果を紹介する。山梨県埋蔵文化財センター、甲府市の調査はいずれも榎田遺跡として指定されている範囲の北側に位置する。公益財団法人山梨文化財研究所によって行われた調査は今回の調査地点に近接している。

#### 1. 平成 4 年 山梨県埋蔵文化財センター

遺構—住居跡 28 軒（弥生時代後期 1、古墳時代前期 1、古墳時代後期 12、奈良時代 8、平安時代 5、時期不明 1）  
方形周溝墓（古墳時代前期）

土坑 114 基（縄文時代中期初頭 3、古墳時代中期 4、時期不明 107）、

溝状遺構 3 条（古墳時代前期 1、時期不明 2）

掘立柱建物 1 棟

遺物—土器（縄文時代前期～後期、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代）

石器（縄文時代前期～後期、古墳時代、奈良時代、平安時代）

土製品（古墳時代後期） 鉄製品（古墳時代～平安時代）

特殊な遺物—古墳時代前期（特殊器台・有段口縁壺・隆帯装飾壺・手焙り型土器）  
古墳時代後期（土鈴・土製スプーン）

平安時代（竈型土器）

甲府市で行われた榎田遺跡に関わる試掘調査の中で注目すべき地点の調査結果を紹介する。

#### 2. 平成 8 年（第 2 次）千塚 5 丁目

遺構—溝跡 9 条—溝跡には洪水の流路の可能性が  
ある溝が含まれる。溝跡は出土遺物から 13 世紀  
初頭から後半と考えられる。

竪穴建物 1 棟、ビット 2 基、土坑 1 基

遺物—溝跡—灰釉陶器、常滑甕、華南白磁、龍泉・  
同安窯青磁、外耳鍋、手づくねかわらけ

竪穴建物—土師器、須恵器の蓋、甕

その他、16 世紀後半の青花皿 等

#### 3. 平成 8 年（第 3 次）—平成 4 年山梨県埋蔵文化財センターの調査地点の道路を挟んで東側に位置する。

遺構—溝跡 8 条、竪穴建物 15 棟、土坑 22 基



第 3 図 調査地点図（「山梨県史」より）



第 4 図 調査地点図（「甲府市内遺跡Ⅲ」より）



遺物—土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、かわらけ、白磁、青磁、土製品、瓦、縄文土器 等

#### 4. 平成 25 年度・26 年度調査—公益財団法人山梨文化財研究所

平成 25 年度

竪穴建物 1 棟、土坑 66 基、ピット 75 基、溝状遺構 28 条、不明遺構 2 基

竪穴建物—囲戸裏の痕跡。遺物は土師質土器、陶器片、青磁片、木質が付着する板状鉄製品、鉄製角釘片、凹石状石製品、砥石、火打ち石等。13 世紀半ば～14 世紀前葉  
土坑墓 4 基 (SK57 から人骨)

SK57 (頭位は北で顔面は東、人骨胴体部分に大型礫=抱石葬)・土師質皿・中国銭。

16 世紀後半代

溝状遺構—調査 2 区 SD1 は方形周溝墓に伴う溝もしくは区画溝の可能性。赤彩された弥生土器片。

平成 26 年度

竪穴建物 1 棟、土坑 82 基、ピット 10 基、溝状遺構 12 条

竪穴建物—板壁もしくは根太が付設されていた状況が推察。囲戸裏の下部の痕跡。遺物は土師質土器、陶器片、青磁片、鉄製刀子片や鑽状鉄製品。13 世紀半ば～14 世紀前葉

土坑墓 1 基—SK62 火葬墓 (土器類や墓誌等なし) SK70 集石土坑—陶器破片

溝状遺構—流路 6 条、道路側溝 4 条



第 5 図 調査地点図 (『榎田遺跡—都市計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う甲府市千塚 4 丁目 3048-9 他及び千塚 5 丁目 3046-1 地点の発掘調査—』2016 公益財団法人山梨文化財研究所よりトレース、一部削除、今回の調査地点合成)

## 第3章 調査の方法

重機の掘削土は調査区外に仮置場を確保できたが、反転調査時の重機掘削土や人力による掘削土の置場を調査区内に確保する必要があった。そのため調査区を構造物や地番により北区と南区に分け、さらに北区をⅠ・Ⅱ区、南区をⅢ・Ⅳ区とした。調査はⅠ・Ⅲ区、Ⅱ・Ⅳ区の組み合わせで行い、掘削していない区域及び調査終了区域を反転調査時の重機掘削土や人力掘削土の置場とした。全調査が終了した時点で調査区外に搬出した掘削土での埋め戻しを行った。

遺構の計測および土層断面・遺物出土状況図の写真測量は、CUBIC社製トータルステーションシステム電子平板「遺構くん」を使用した。「遺構くん」により作成した図面および補正した写真測量写真は adobe 社製「illustratorCC15」により全体図、個別図、土層断面図を作成した。

出土した遺物は、遺構に係る遺物はトータルステーションシステムにより位置を計測し取り上げを行った。表土、遺物包含層から出土した遺物は区域毎に取り上げた。

使用システム

トータルステーション TOPCON SOKKIA CX-105

電子平板 Panasonic TOUGHBOOK CF-19

遺構実測支援ソフト CUBIC社「遺構くん」電子平板対応

## 第4章 調査の概要

### 第1節 検出状況（第6図）

遺構は、竪穴遺構（SI）2基、溝状遺構（SD）5条、土坑（SK）17基（含土壇墓1基）、ピット（SP）85基が検出された。区域によって堆積状況の違いや攪乱の影響により遺構の検出状況は異なる。

北区と南Ⅲ区の北～東側は遺構確認面である褐色砂質土が全面で確認され、遺構もほぼ全面で検出された。南Ⅲ区の西側とⅣ区にかけては荒川の氾濫と思われる礫層に覆われていたが、Ⅲ区では礫を意図的に外したと思われる空間に黒褐色土、暗褐色土を覆土とする竪穴状遺構が検出された。

### 第2節 土層断面（第7・8図）

現況地盤より、約0.5～0.7m下で遺構確認面が検出された。北区は、ほぼ全面褐色砂質土である。南区は、Ⅲ区の北および東側で安定した褐色砂質土が確認された。一方で荒川の氾濫に起因すると思われる礫層がⅢ区の北西隅から中央部方面に流れ、そこから南に向かって確認された。Ⅳ区は、攪乱を受けているが調査区の北東隅に、僅かに安定した褐色砂質土が確認されたのみで、Ⅲ区から続く礫層が調査区のほぼ全面にわたり検出された。

各調査区で異なるが基本層序は以下の通りである。約0.5m～0.7mで4層の遺構確認面が検出される。地点によっては4層や5～6層が無く7層で中世や古墳時代の遺構が検出される。

1. 表土（碎石、整地層）
2. 10YR3/3 暗褐色砂質土
3. 10YR3/2 黒褐色砂質土
4. 10YR3/3 暗褐色砂質土 中世の遺構確認面
5. 10YR1.7 黒色砂質土 古墳時代の遺構の覆土
6. 10YR3/2 黒褐色砂質シルトに7層が混じる。漸移層
7. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土 古墳時代、中世の遺構確認面 Ⅰ～Ⅲ区の地山
8. 礫層（Ⅲ区の一部とⅣ区）

## 第5章 検出遺構

### 第1節 竪穴状遺構 (第9・10図)

#### ①1号竪穴状遺構 (SI1) (第9図)

北区のオリブ褐色砂質土層で検出され東側は調査区外に延びており SK16 の上部を切っている。検出された長さは 2.23m、幅 1.10m 深さは 0.14m を測る。かわらけと挿鉢が出土している。

#### ②2号竪穴状遺構 (SI2) (第10図)

南区の暗褐色砂質土層で検出され西側は調査区外に延びており SK11 に切られている。検出面の下層は礫層である。検出された長さは 1.78m、幅 1.45m 深さは 0.16m を測る。

### 第2節 溝状遺構 (第11～14図)

5条が検出された。

#### ①1号溝状遺構 (SD1) (第11図)

北区の黄褐色砂質シルト層で検出され東側は調査区外に延びている。検出された長さは 4.78m、幅 1.00m 深さは 0.22m を測る。覆土は黒色砂質シルトで過去の周辺の調査で検出された方形周溝墓の覆土と共通しているが、土層断面を見ると明確な遺構とは断定出来ない。周辺の地形は南東方向に傾斜していることを考えると自然地形に堆積した黒色土の可能性も考えられる。

#### ②2号溝状遺構 (SD2) (第12図)

北区の黄褐色砂質シルト層で検出された。主軸の方位は N-70°-E から N-60°-W と方向を変えている。検出された長さは 2.18m、幅は最大 0.56m、深さは 0.16m を測る。

#### ③3号溝状遺構 (SD3) (第13図)

南区の黄褐色砂質シルト層で検出された。検出された部分での長さは 1.20m、幅は 0.47m、深さは 0.27m を測る。

#### ④4・5号溝状遺構 (SD4・SD5) (第14図)

北区で検出された。各溝共に東西に延びていると思われる。覆土は黒色砂質シルトである。調査区壁面の土層断面から古い順に SD4 → SD5 となる。検出された規模は、SD5 は長さ 3.96m、幅 1.88m、深さ 0.82m、主軸の方位は N-28°-E、SD4 の検出された長さは 4.52m、幅 1.29m、深さ 0.41m、主軸の方位は N-48°-E を測る。

遺物は、SD4 では古墳時代と思われる広口壺の口縁から胴部上半をはじめ土師器が主体を占めている。SD4・SD5 ともに、溝の形状や覆土から方形周溝墓の溝の可能性が考えられる。

### 第3節 土壇墓・土坑 (第15～28図、表2)

土壇墓1基、土坑16基が検出された。SK8は土壇墓である。SK1は西側に延びているため断定は出来ないが形状や断面から古墳時代の溝状遺構の先端部の可能性が考えられる。また、SK6・12・14は形状から土壇墓の可能性が考えられる。主な遺構を紹介する。その他は計測表に掲載した。

#### ①1号土坑 (SK1) (第15図)

北区の黄褐色砂質シルト層で検出された。覆土は灰褐色砂質シルトである。西側に延びている。検出された長さは 2.38m、幅は 1.53m、深さは 0.66m を測る。

#### ②6号土坑 (SK6) (第20図)

南区の黄褐色砂質シルト層で検出された。覆土は黒褐色砂質土である。西側に延びている。検出さ

れた長さは1.35m、幅は1.80m、深さは0.36mを測る。

③ 8号土坑（土墳墓）（SK8）（第21・22図）

南区で検出された。覆土は褐色砂質土である。調査区の北西隅で検出されたため調査区を拡張した。人骨、ほぼ完形のかわらけ1点、中国銭5枚（第22・34図）が出土した。検出された長さは1.36m、幅は0.84m、深さは0.19mを測る。頭位は北西で顔は西を向いている。屈葬と思われる。周囲には骨片が散っていた。

④ 10号土坑（SK10）（第24図）

南区で検出された。覆土は暗褐色砂質土である。検出された長さは0.50m、幅は0.43m、深さは0.29mを測る。内耳土器が出土している。

⑤ 12号土坑（SK12）（第26図）

南区で検出された。覆土は暗褐色砂質土である。検出された長さは1.27m、幅は0.81m、深さは0.41mを測る。土坑内では2基のピットが検出されている。

⑥ 14号土坑（SK14）（第28図）

北区の黄褐色砂質シルト層で検出された。覆土は暗褐色砂質土である。検出された長さは1.45m、幅は1.04m、深さは0.45mを測る。遺物はかわらけ、播鉢、砥石が出土している。

⑦ 16号土坑（SK16）（第9図）

北区の黄褐色砂質シルト層で検出された。覆土は黒褐色砂質土である。東側に延びている。検出された長さは1.55m、幅は0.96m、深さは0.41mを測る。弥生土器片が出土しているが周辺は攪乱が著しく流入の可能性も考えられる。

表2 土坑計測表

遺構名	調査区	平面形	規模 m ※（現存値）			切りあい	出土遺物	備考	図番号
			長軸	短軸	深さ				
SK1	北Ⅰ	不整形	(2.38)	1.53	0.66	SK1-SP12		西調査区外に延びている。	第15図
SK2	北Ⅰ	—	(1.43)	0.45	0.42	SK2-SP2.9		西調査区外に延びている。	第16図
SK3	北Ⅰ	—	(0.61)	(0.20)	0.47	SK3-SP16.20		西調査区外に延びている。	第17図
SK4	北Ⅰ	不整形	0.60	0.37	0.48				第18図
SK5	北Ⅰ	長楕円形	0.64	0.35	0.27				第19図
SK6	南Ⅱ	—	(1.35)	1.80	0.36	SK6-SK7		北調査区外に延びている。	第20図
SK7	南Ⅱ	不整形	1.02	0.83	0.21		かわらけ		第20図
SK8	南Ⅱ	方形	1.36	0.84	0.19	SK17-SK8	人骨、かわらけ、銭	中世墓	第21図
SK9	南Ⅲ	—	1.06	(0.68)	0.23			東調査区外に延びている。	第23図
SK10	南Ⅲ	不整形	0.50	0.43	0.29		内耳		第24図
SK11	南Ⅲ	楕円形	0.81	0.6	0.33	SI2-SK11			第25図
SK12	南Ⅲ	隅丸方形	1.27	0.81	0.41				第26図
SK13	北Ⅱ	長楕円形	1.27	0.63	0.21				第27図
SK14	北Ⅱ	不整形	1.45	1.04	0.45	SK14-SP80	かわらけ、播鉢、砥石		第28図
SK15	北Ⅱ	楕円形	(0.82)	0.47	0.15	SK15-SK13			第27図
SK16	北Ⅱ	—	1.55	(0.96)	0.41	SI1-SK16-SP83	弥生土器	東調査区外に延びている。	第9図
SK17	南Ⅲ	楕円形	(1.03)	(0.46)	0.18	SK17-SK8			第21図

第4節 ビット (第29～31図、表3～4)

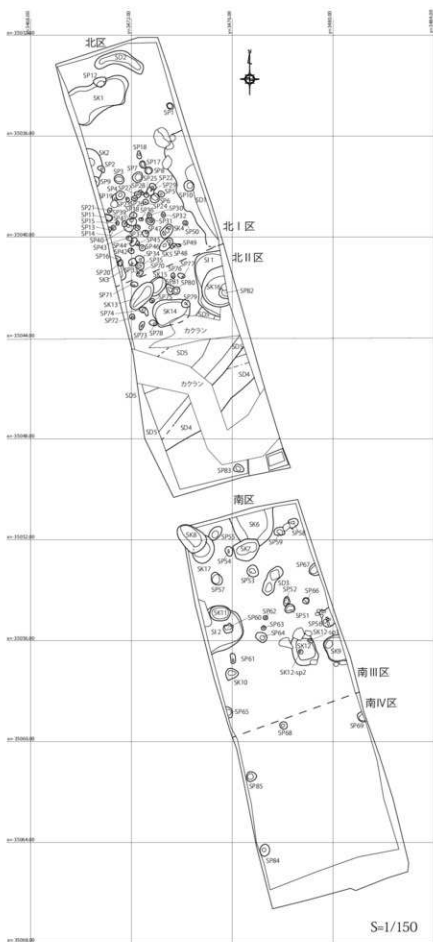
85基が検出された。いずれも基本的な覆土は、北区(北Ⅰ、北Ⅱ区)、南Ⅳ区が暗褐色砂質土、南Ⅲ区は灰黄褐色砂質土である。Ⅰ区で検出されたSP4の覆土は暗褐色土、Ⅲ区で検出されたSP57の覆土は灰黄褐色砂質土と、覆土は異なっているが16世紀代のかかわりが出土している。以上の事から覆土は異なるもののビットは中世以降に属すると思われる。規模はビット計測表にまとめた。

表3 ビット計測表(1)

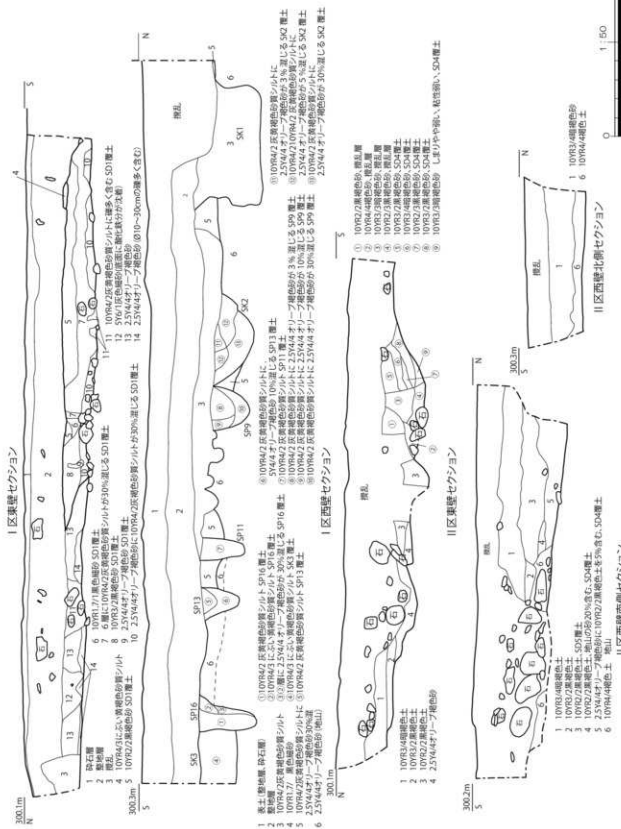
遺構名	地点	平面形	規模 cm ※ (現存値)			重複関係	備考	図番号
			長軸	短軸	深さ			
SP1	北Ⅰ	楕円形	59	47	26			第29図
SP2	北Ⅰ	不整形	63	40	8			第29図
SP3	北Ⅰ	楕円形	41	37	38			第29図
SP4	北Ⅰ	楕円形	35	34	24	SP19-SP4		第29図
SP5	北Ⅰ	楕円形	52	46	49			第29図
SP6	北Ⅰ	楕円形	76	69	47			第29図
SP7	北Ⅰ	楕円形	86	75	30			第29図
SP8	北Ⅰ	楕円形	62	56	39			第29図
SP9	北Ⅰ	—	39	16	40	SK2-SP9	西調査区外に延びている。	第16図
SP10	北Ⅰ	楕円形	85	80	43	SD1-SP10		第29図
SP11	北Ⅰ	楕円形	36	27	55		西調査区外に延びている。	第6図
SP12	北Ⅰ	不整形	50	39	—	SK1-SP12		第15図
SP13	北Ⅰ	—	(23)	(11)	47		西調査区外に延びている。	第6図
SP14	北Ⅰ	楕円形	36	33	16			第29図
SP15	北Ⅰ	楕円形	33	26	15			第29図
SP16	北Ⅰ	不整形	(22)	(19)	75	SP16-SP20	西調査区外に延びている。	第17図
SP17	北Ⅰ	長楕円形	61	56	34			第29図
SP18	北Ⅰ	不整形	64	35	42			第29図
SP19	北Ⅰ	不整形	29	24	9	SP19-SP4		第29図
SP20	北Ⅰ	不整形	25	22	—		西調査区外に延びている。	第17図
SP21	北Ⅰ	楕円形	40	33	13	SK3-SP20		第29図
SP22	北Ⅰ	楕円形	31	21	31	SP29-SP22		第29図
SP23	北Ⅰ	不整形	37	26	25			第29図
SP24	北Ⅰ	円形	22	21	12			第29図
SP25	北Ⅰ	不整形	21	17	15	SP29-SP25		第29図
SP26	北Ⅰ	不整形	24	20	15	SP28-SP27-SP26		第29図
SP27	北Ⅰ	不整形	25	(21)	25	SP28-SP27-SP26		第29図
SP28	北Ⅰ	不整形	24	15	22	SP28-SP27-SP26		第29図
SP29	北Ⅰ	不整形	33	28	23	SP29-SP22.25		第29図
SP30	北Ⅰ	楕円形	19	18	14			第29図
SP31	北Ⅰ	不整形	35	28	25			第29図
SP32	北Ⅰ	不整形	20	16	9			第30図
SP33	北Ⅰ	不整形	31	30	13			第30図
SP34	北Ⅰ	不整形	34	26	18			第30図
SP35	北Ⅰ	不整形	32	27	30			第30図
SP36	北Ⅰ	不整形	17	12	11			第30図
SP37	北Ⅰ	不整形	22	20	20			第30図
SP38	北Ⅰ	不整形	27	20	22			第30図
SP39	北Ⅰ	不整形	38	28	49	SP40-SP39		第30図
SP40	北Ⅰ	不整形	41	27	34	SP40-SP39		第30図
SP41	北Ⅰ	不整形	23	19	15	SP40-SP41		第30図

表4 ビット計測表(2)

遺構名	地点	平面形	規模 cm ※(現存値)			重複関係	備考	図番号
			長軸	短軸	深さ			
SP42	北Ⅰ	楕円形	24	20	21			第30図
SP43	北Ⅰ	不整形	(21)	18	25	SP44-SP43		第30図
SP44	北Ⅰ	不整形	35	20	26	SP44-SP43		第30図
SP45	北Ⅰ	不整形	18	16	8	SP45-SP44		第30図
SP46	北Ⅰ	不整形	24	22	24			第30図
SP47	北Ⅰ	楕円形	28	25	36			第30図
SP48	北Ⅰ	不整形	27	13	22			第30図
SP49	北Ⅰ	不整形	18	12	14			第30図
SP50	北Ⅰ	円形	20	19	5			第30図
SP51	南Ⅲ	不整形	41	33	11			第30図
SP52	南Ⅲ	不整形	40	25	9			第30図
SP53	南Ⅲ	不整形	47	45	25			第30図
SP54	南Ⅲ	楕円形	39	29	14			第30図
SP55	南Ⅲ	楕円形	65	39	10			第30図
SP56	南Ⅲ	—	70	46	13		東調査区外に延びている。	第30図
SP57	南Ⅲ	不整形	53	42	34			第30図
SP58	南Ⅲ	不整形	(36)	33	22			第31図
SP59	南Ⅲ	不整形	40	31	13			第31図
SP60	南Ⅲ	不整形	41	31	32			第25図
SP61	南Ⅲ	不整形	39	18	-			第6図
SP62	南Ⅲ	円形	19	17	10			第31図
SP63	南Ⅲ	円形	20	17	7			第31図
SP64	南Ⅲ	不整形	45	36	24			第31図
SP65	南Ⅲ	—	45	22	-		西調査区外に延びている。	第6図
SP66	南Ⅲ	不整形	25	24	14			第31図
SP67	南Ⅲ	—	44	34	-		東調査区外に延びている。	第6図
SP68	南Ⅳ	円形	31	29	23			第31図
SP69	南Ⅳ	—	42	24	-		東調査区外に延びている。	第6図
SP70	北Ⅰ	長楕円形	30	17	25			第31図
SP71	北Ⅱ	楕円形	28	19	14			第31図
SP72	北Ⅱ	不整形	22	19	16			第31図
SP73	北Ⅱ	長楕円形	35	18	27			第31図
SP74	北Ⅱ	不整形	41	24	14			第6図
SP75	北Ⅱ	楕円形	19	16	18			第31図
SP76	北Ⅱ	楕円形	22	16	25			第31図
SP77	北Ⅱ	楕円形	29	19	35			第31図
SP78	北Ⅱ	楕円形	31	22	32			第31図
SP79	北Ⅱ	楕円形	32	31	41	SK14-SP80		第31図
SP80	北Ⅱ	楕円形	32	28	20	SP81-SP80		第31図
SP81	北Ⅱ	不整形	44	31	15	SP81-SP80		第31図
SP82	北Ⅱ	—	33	33	41	SK16-SP82		東調査区外に延びている。
SP83	北Ⅱ	不整形	39	31	14			第31図
SP84	南Ⅳ	長楕円形	48	38	17			第31図
SP85	南Ⅳ	楕円形	40	39	26			第31図



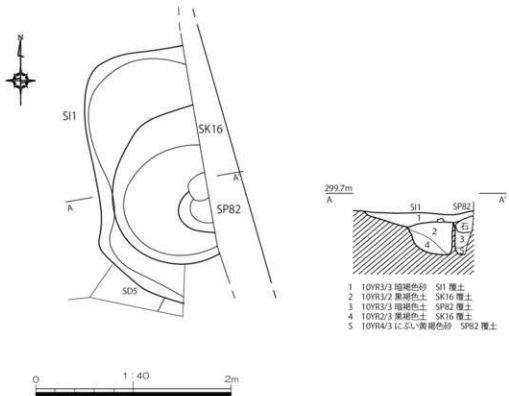
第6図 遺構分布図



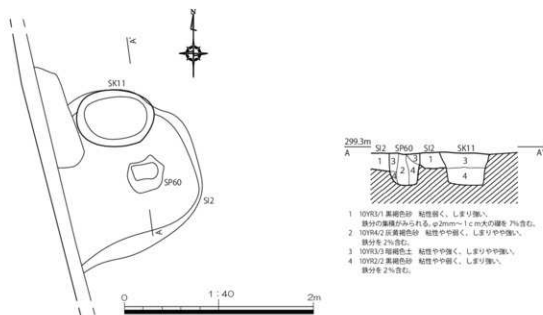
第7図 調査区（I・II区）の土層断面



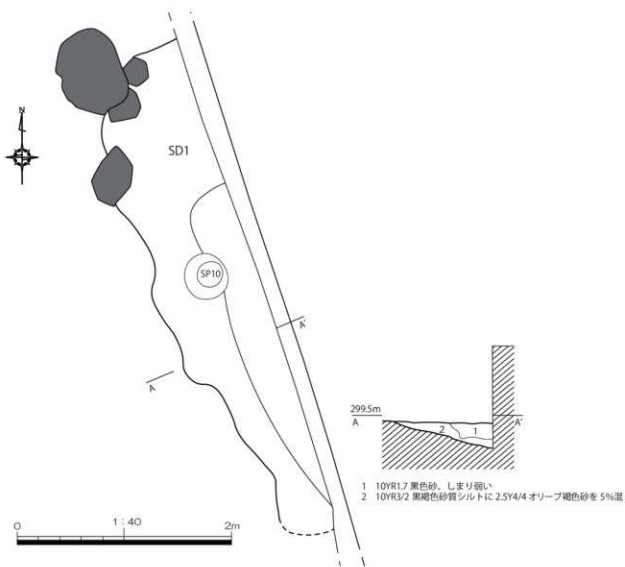




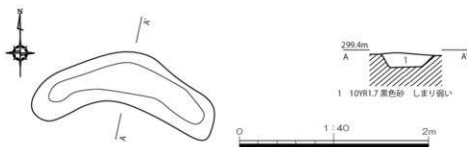
第9図 1号竪穴状遺構(SI1)・16号土坑(SK16)・82号ピット(SP82)



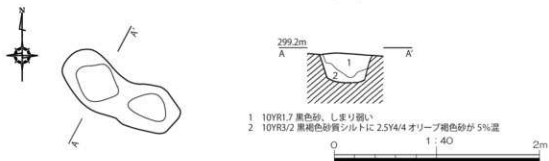
第10図 2号竪穴状遺構(SI2)・11号土坑(SK11)・60号ピット(SP60)



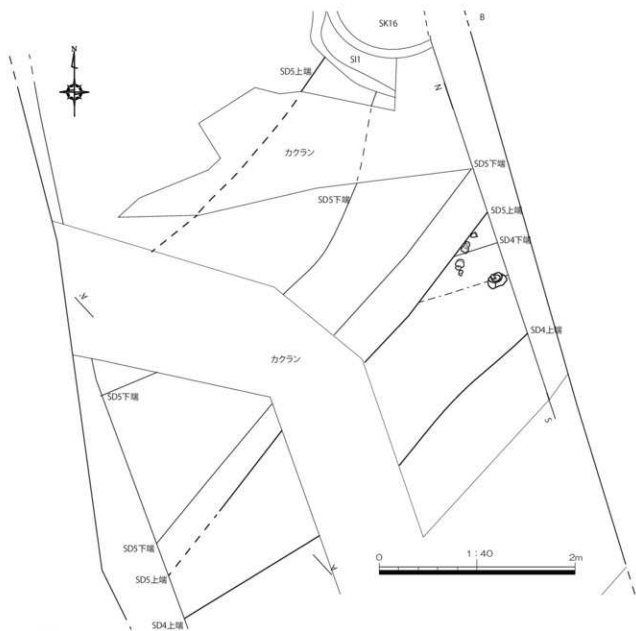
第11図 1号溝状遺構 (SD1)



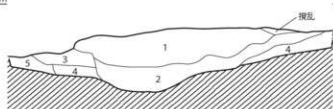
第12図 2号溝状遺構 (SD2)



第13図 3号溝状遺構 (SD3)



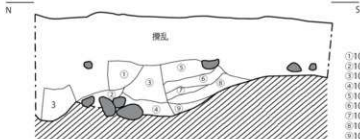
299.8m



SD4・5西ベルトセクション

- 1 10YR2/3黒褐色砂質土 SDS覆土
- 2 10YR2/2黒褐色砂質土 SDS覆土
- 3 2.5YR2/1黒色砂質土 SD4覆土
- 4 10YR3/3暗褐色砂質土 SD4覆土
- 5 10YR2/3黒褐色砂質土 SD4覆土

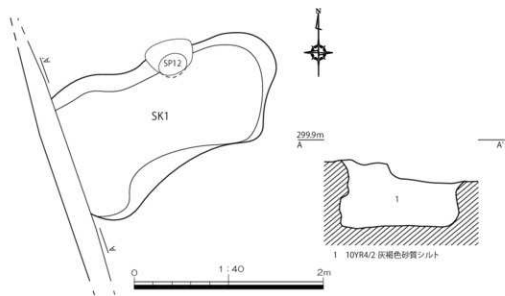
300.1m



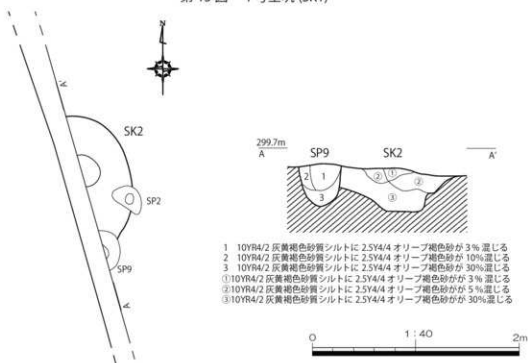
SD4・5東壁セクション

- ① 10YR2/2黒褐色砂質土 攪乱層
- ② 10YR4/4褐色砂質土 攪乱層
- ③ 10YR3/3暗褐色砂質土 攪乱層
- ④ 10YR2/3黒褐色砂質土 攪乱層
- ⑤ 10YR3/2黒褐色砂質土 SD4覆土
- ⑥ 10YR3/4暗褐色砂質土 SD4覆土
- ⑦ 10YR3/3黒褐色砂質土 SD4覆土
- ⑧ 10YR3/2黒褐色砂質土 SD4覆土
- ⑨ 10YR3/3暗褐色砂質土 SD4覆土

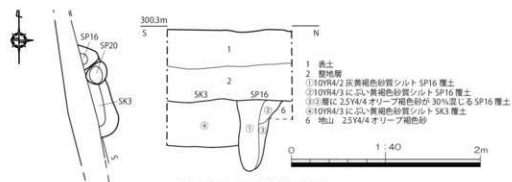
第14図 4・5号溝状遺構 (SD4・SD5)



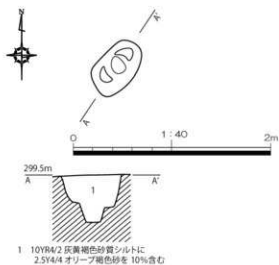
第15図 1号土坑(SK1)



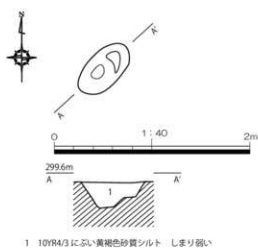
第16図 2号土坑(SK2)



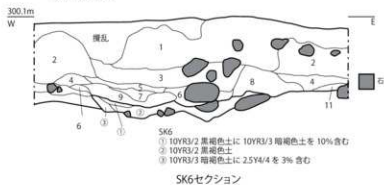
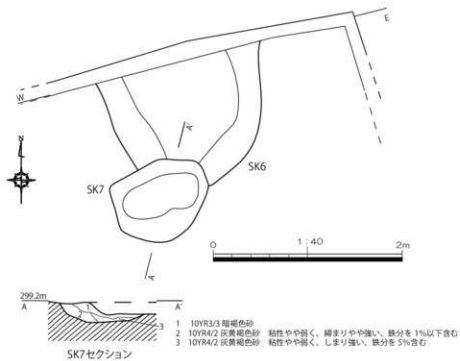
第17図 3号土坑(SK3)



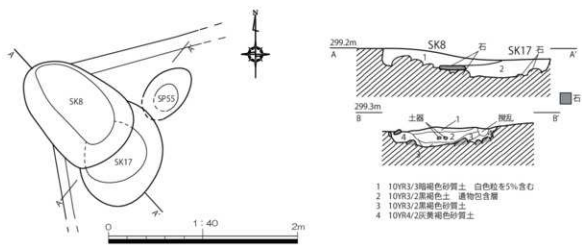
第 18 図 4号土坑 (SK4)



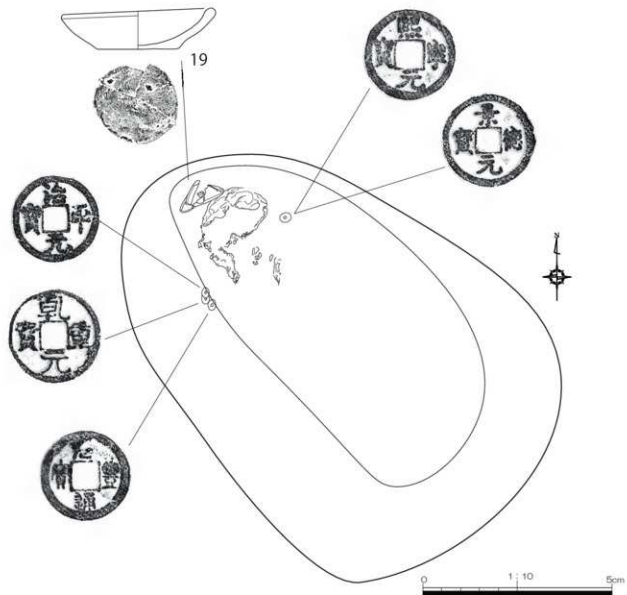
第 19 図 5号土坑 (SK5)



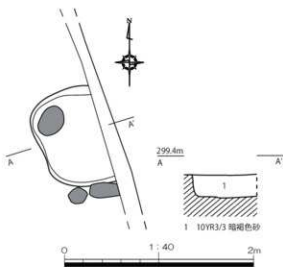
第 20 図 6・7号土坑 (SK6・SK7)



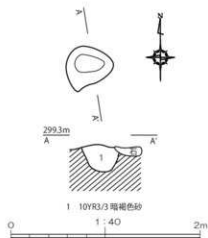
第 21 图 8·17 号土坑 (SK8·SK17)



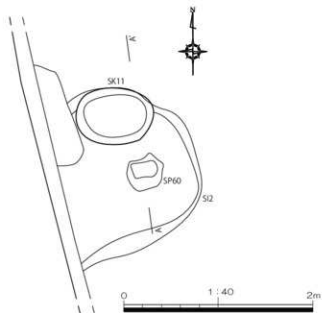
第 22 图 8 号土坑 (土填墓) 人骨·遺物出土状况



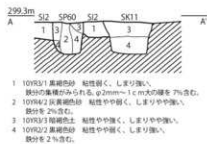
第23図 9号土坑(SK9)



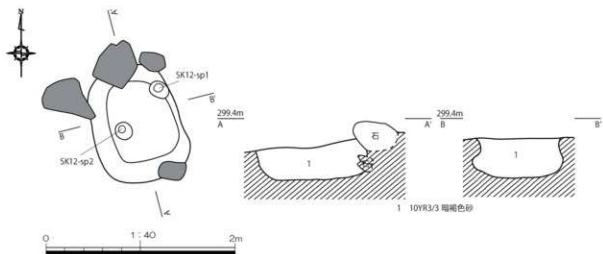
第24図 10号土坑(SK10)



第25図 11号土坑(SK11)

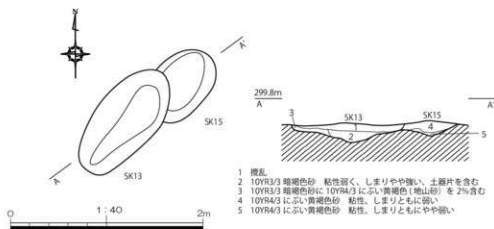


- 1 10YR3/1 黄褐色砂 粘性弱く、しまり強い。  
鉄砂の集積がみられる。φ2mm～1cm次の隙を7%含む。
- 2 10YR2/2 黄褐色砂 粘性やや弱く、しまりやや強い。  
鉄砂を2%含む。
- 3 10YR3/3 黄褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
- 4 10YR2/2 黄褐色砂 粘性やや弱く、しまり強い。  
鉄砂を2%含む。

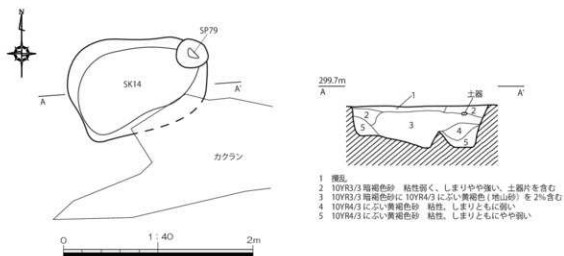


第26図 12号土坑(SK12)

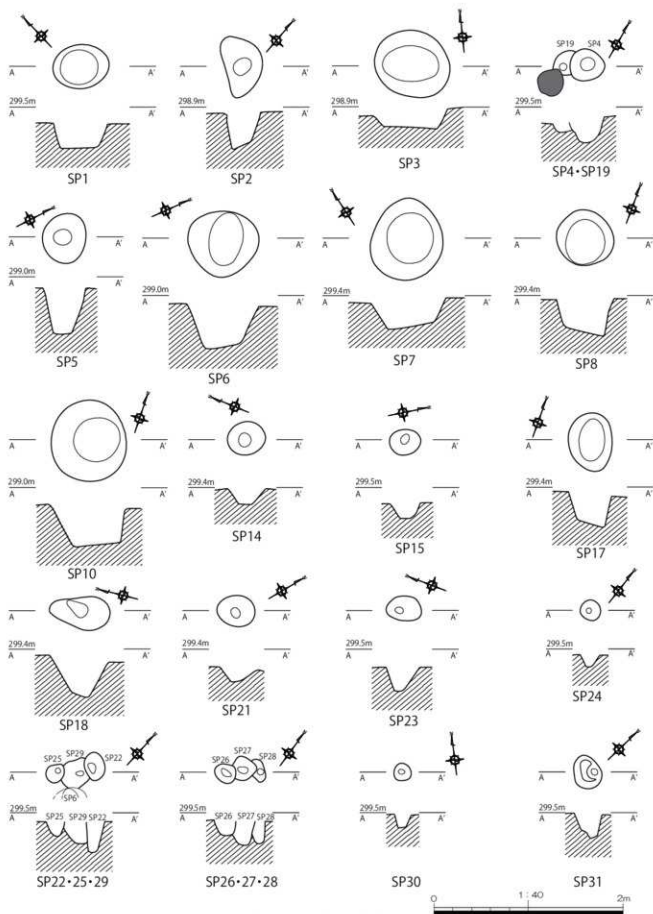




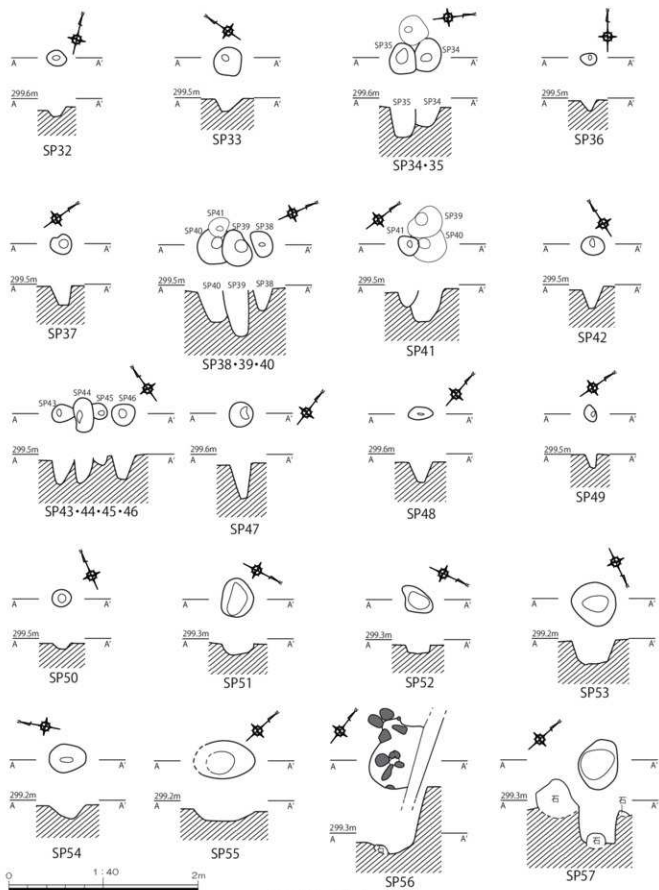
第 27 図 13・15 号土坑 (SK13・SK15)



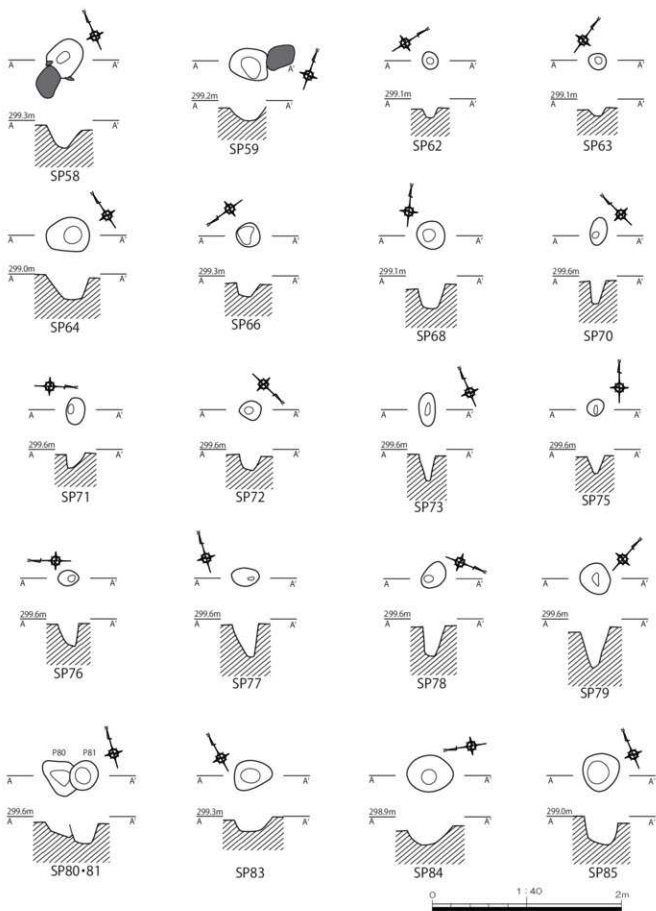
第 28 図 14 号土坑 (SK14)



第29図 ピット(1)



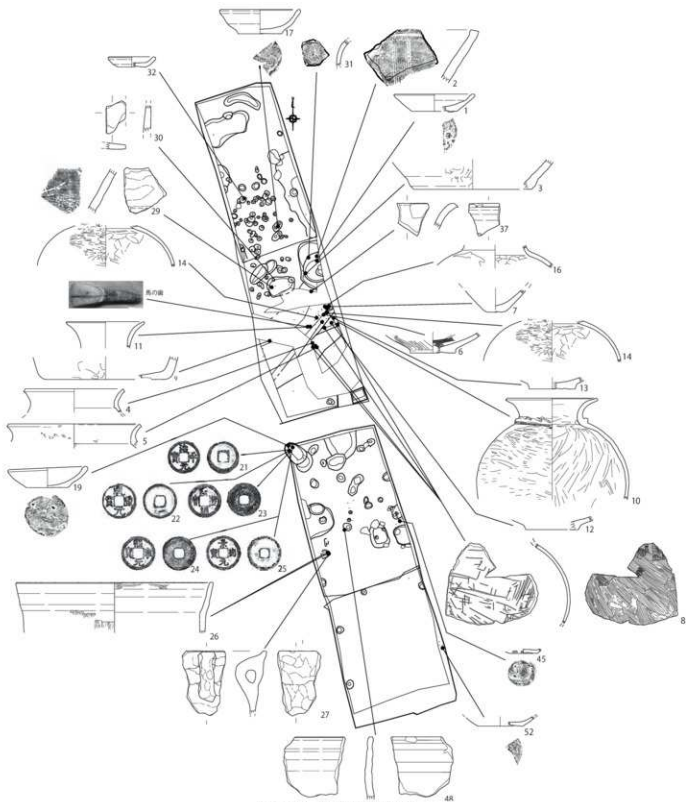
第30図 ビット (2)



第31図 ビット (3)

## 第6章 出土した遺物

遺物は古墳時代、中世の遺物を主体として、その他遺構外では縄文土器、常滑焼の裏の破片、近世以降と思われる青磁片、瓦が出土している。(第 32～35 図、表 5～7)。



第 32 図 遺物出土分布図

#### SI1 から出土した遺物

1はかわらけである。体部はやや内湾しながら立ち上がり口縁部は直線的に外に開く。体部に大きな稜線が1本形成される。ロク口成形。胎土はやや粗く器壁は厚い。時期は15世紀末から16世紀初に属すると思われる。2は摺鉢の口縁部～体部で9本の縦位の摺り目が残る。口縁部はやや上に立ち上がり口縁端部にはナデによる凹凸が見られる。時期は16世紀初に属すると思われる。3は摺鉢の底部外周部～体部である。体部下端から外に開いて立ち上がっており、時期は15世紀末から16世紀初めに属すると思われる。

#### SD4 から出土した遺物

4～8は古墳時代の土師器である。4・5は甕の口縁部である。4の外面はヘラナデ調整。頸部に僅かにハケメが残る。口縁端部にもヘラナデ調整が施されている。口縁部の内面はヘラナデ調整後一部にナデ調整、頸部と胴部の境に横位のハケメ調整後ナデ調整が施されている。5の外表面はヘラナデ調整。頸部に僅かにハケメが残る。口縁端部にもヘラナデ調整が施されている。口縁部の内面はヘラナデ調整後一部にナデ調整、頸部に横位のハケメ。6は壺の底部～体部下部である。外に開きながら僅かに内湾している。外面は丁寧なケズリ調整、底部の外周は粗いケズリで中央部は窪む。内面は横位のハケ調整後ヘラナデ調整が施されている。7は壺の底部である。外面・内面共に粗いケズリ調整が施されている。8は甕の体部である。外面の上部には目の細かい斜、横、縦位のハケ調整後、ナデ調整、やや目の細かい斜位のハケメ調整。体部最大径と思われる上方から下部は目の粗いハケ調整。内面はケズリ調整が施される。9は土師質の火鉢である。内面に灰が付着している。9のみ時期が異なることから混入したと考えられる。10～14は古墳時代の土師器である。10は頸部の凸帯に細かい縄目の棒状工具による刻みがある壺。頸部と体部の境には全体に5本1単位の櫛描文を施した後、凸帯より間隔の広い縄目の棒状工具による刻みが施されている。外面の口縁部から頸部は横ナデ、口縁端部は棒状工具のナデによる凹が見られる。体部は全面ケズリ。内面は全面ケズリ調整が施されている。11は壺の口縁部～頸部である。口縁部は外・内面ともにナデ調整、頸部は外・内面ともにミガキ調整が施されている。12は壺の底部～体部下部である。底部から外に開いている。ケズリ調整、内面はヘラナデ調整が施されている。13は壺の底部～体部下部である。外面の体部はミガキ調整、底部はケズリ調整が施されている。内面はケズリ調整。やや内湾して立ち上がっている。14は壺の体部である。外面はミガキ調整、内面の頸部は丁寧なケズリ、体部は粗いケズリ調整が施されている。

#### SD5 から出土した遺物

15は壺の口縁部～頸部である。外面の口縁部～頸部はミガキ調整、頸部と体部の境には縦位のハケメが残る。内面の口縁部～頸部はミガキ調整、頸部と体部の境はケズリ調整が施されている。16は壺の頸部～体部である。外面の頸部はヘラケズリ、体部はミガキ調整、内面の頸部は丁寧なケズリ、体部は粗いケズリ調整が施されている。赤彩が残る。

#### SK4 から出土した遺物

17はかわらけの口縁部～底部である。底部からやや内湾しながら立ち上がり口縁部は僅かに外に開く。体部には大きな稜線が見える。器壁は厚い。外・内面ともにロクロナデ。底部には回転糸切り痕。内面の底部はヘラナデ調整が施されている。16世紀に属すると思われる。

#### SK7 から出土した遺物

18は内耳土器の底部～体部下部である。底部から体部下までは直線的に外に開いている。底部の器壁は薄く、体部の器壁は厚い。盤形か。16世紀に属すると思われる。

#### SK8（土墳墓）から出土した土器

19はかわらけのほぼ完形品である。底部からやや内湾しながら立ち上がり口縁部はやや外側に開きながら肥厚する。外・内面ともにロクロナデ。底部に回転系切り痕。16世紀に属すると思われる。20はかわらけの口縁部～底部である。底部から直線的に外に開く。底部に回転系切り痕。体部に大きな稜線を2本持つ。外・内面ともにロクロナデ。16世紀に属すると思われる。

21～25は中国銭で人骨の副葬品である。21は「治平元宝」で1064年初鑄。径は23mm。22は「札元重宝」で背は背下月文。758年初鑄。径は24mm。23は「元豊通宝」で1078年初鑄。径は23mm。24・25は背で重なっていた。24は「熙寧元宝」で1068年初鑄。径は24mm。25は「景德元宝」で1004年初鑄。径は24mm。

#### SK10から出土した遺物

26・27は内耳土器である。26は口縁部～体部で口縁部は開き体部はほぼ直立している。深鍋形と思われる。27は耳部である。胎土等から26と同一個体と思われる。15世紀中葉から後葉の特徴を持つ。

#### SK14から出土した遺物

28はかわらけの口縁部～底部である。底部から内湾し口縁部でやや外に開く。ナデ調整。底部に回転系切り痕。16世紀に属すると思われる。29は搦鉢の体部である。9本の摺り目が確認出来るが擦過痕によりほとんど凹凸が無くなっている。よく使い込まれている。30は砥石である。片面のみ砥ぎ面が確認される。

#### SK16から出土した遺物

31は弥生土器の壺の頸部と思われる。櫛描波状文。内面はケズリ調整が施されている。

#### SP4から出土した遺物

32はかわらけの口縁部～底部である。底部からやや内湾して立ち上がり口縁部は肥厚して外に開く。器壁は厚い。口縁端部にスガが付着している。ロクロナデ。底部に回転系切り痕。16世紀に属すると思われる。

#### SP57から出土した遺物

33はかわらけの口縁部～底部である。底部からやや内湾して立ち上がり口縁部は外に開く。器壁は薄い。ロクロナデ。底部に回転系切り痕。16世紀に属すると思われる。

#### 北区（遺構外）から出土した遺物

34は土師器の壺の底部～体部である。底部から外に開きながらやや内湾して立ち上がる。体部はミガキ調整、底部は外周のみ丁寧なケズリ調整が施されており中心部は凹んでいる。内面はケズリ調整が施されている。

35・36はかわらけの底部～体部である。いずれも底部から外に開いている。底部に回転系切り痕。37は壺の口縁部～頸部である。外・内面ともにナデ調整。38は鉢の体部である。外面に沈線が施されている。39は陶質土器の甕の体部の破片と思われるが砥石として使用された可能性がある。40は縄文土器である。二本の並行する隆帯の間に刺突文を施した後削って平坦面を作っている。平行する隆帯にキザミのある縦位の隆帯を貼り付けている。縄文時代中期頃と思われる。41は椀である。○サあるいは○廿？の刻印。42は摩耗が激しく最後の「宝」のみ読み取れる。径は24mm。

#### 南三区（遺構外）から出土した遺物

43～46はかわらけの底部～体部である。底部に回転系切り痕。44は底部からほぼ水平に外に開く。器壁は厚い。47は青磁の高台～体部である。48・49は内耳土器である。48は体部で口縁部は僅かに外に開く。体部はほぼ直立して立ち上がる。深鍋形で16世紀前葉に属すると思われる。49は耳部の付いた口縁部

で口唇部は上に平坦面を作りやや内傾している。浅鍋形で16世紀前葉に属すると思われる。50は捏鉢の底部～体部である。開いて立ち上がる。外側はナデ、内面は未調整。51は鉢の底部～体部である。内面に摺り目のような沈線が見られるが摺鉢かとは断定できない。

#### 南Ⅳ区（遺構外）から出土した遺物

52はかわらけの底部～体部である。体部はヘラナデ、底部は回転系切り後ハケ調整。内面はナデ調整が施されている。器壁は薄い。53は内耳土器の底部～体部である。やや外に開いて立ち上がる。

#### 確認調査で出土した遺物

54はかわらけの口縁部～底部である。底部からやや内湾しながら口縁部は肥厚して外に開く。体部に2本の大きな稜線を持つ。外・内面ともにロクロナデ。底部に回転系切り痕。16世紀に属すると思われる。

## 第7章 まとめ

今回の調査では古墳時代と中世の遺構が検出され、遺構に伴い遺物が出土した。

古墳時代の遺構としては溝状遺構のSD4・5が該当する。出土した遺物はその特徴から古墳時代前期の、小林編年（小林健二 2015「甲斐の古墳時代と土器—編年と移動を考える—」『山梨県考古学協会誌第23号』）のⅡ～Ⅲ期に該当すると思われる。遺構の性格としては、平成25年度に公益財団法人山梨文化財研究所によって今回の調査地点の道路を挟んで北東側（第5図）で調査が行われ、方形周溝墓の溝もしくは区画溝と想定される遺構が検出されており、今回検出された溝状遺構に関しても同様の性格が想定できると思われる。

SD4周辺で馬の歯が出土しているが、放射性炭素年代測定を行った結果、近世に属する馬の歯であると測定されたことから、後世の攪乱によるものと考えられる。

SD1は弥生時代末～古墳時代とされる黒色土を覆土としていたが、検出された遺構の断面形状や堆積状況から人為的な溝とは断定出来ない。荒川の流路に黒色土が堆積した可能性が考えられる。

中世の遺構としては土壌墓のSK8が検出された。頭位は北西で顔は西を向いている。副葬品は、かわらけ1点、中国銭5枚が出土した。かわらけの特徴から16世紀代に作られた土壌墓と思われる。

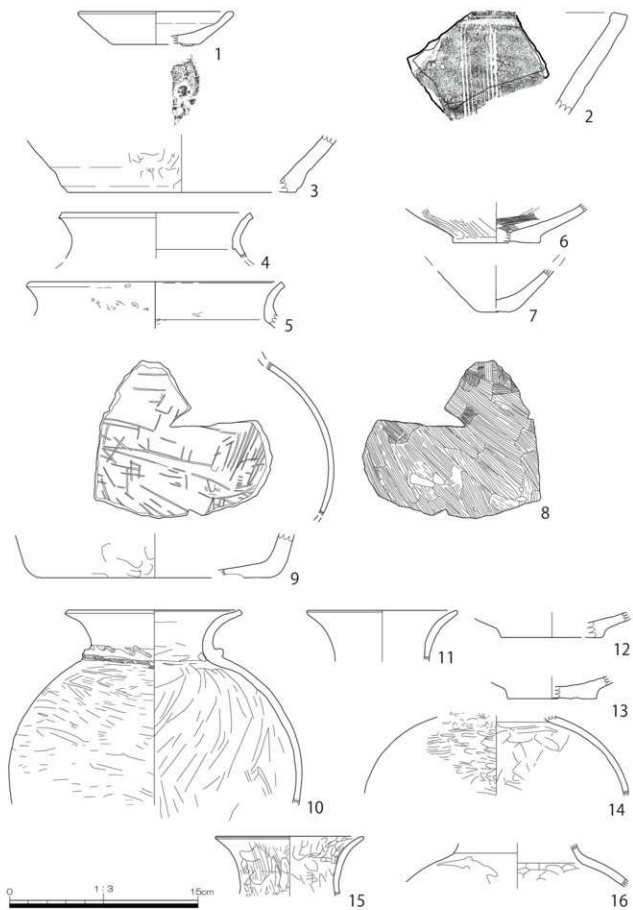
出土した人骨は、鑑定を行ったものの遺存状況が悪く、年齢は「老年には達しておらず」、性別は「下顎がややきしゃに見える」という結果となり特定は出来なかった。

今回出土した遺物はかわらけの他、内耳土器、摺鉢、捏鉢等の土器類が主流を占めている。図示出来なかったが常滑焼の破片や青磁片も出土している。跡部伊賀守信秋の屋敷の伝承地とされる曹洞宗攀桂寺に近接する地点であり、明確な痕跡は確認されなかったが、土壌墓の年代である16世紀代の、まさしく跡部伊賀守信秋の時代の集落としての様相を僅かであるが伺うことができたのではないかと考える。なお、「御嶽道」との関連性も今後の課題といえる。

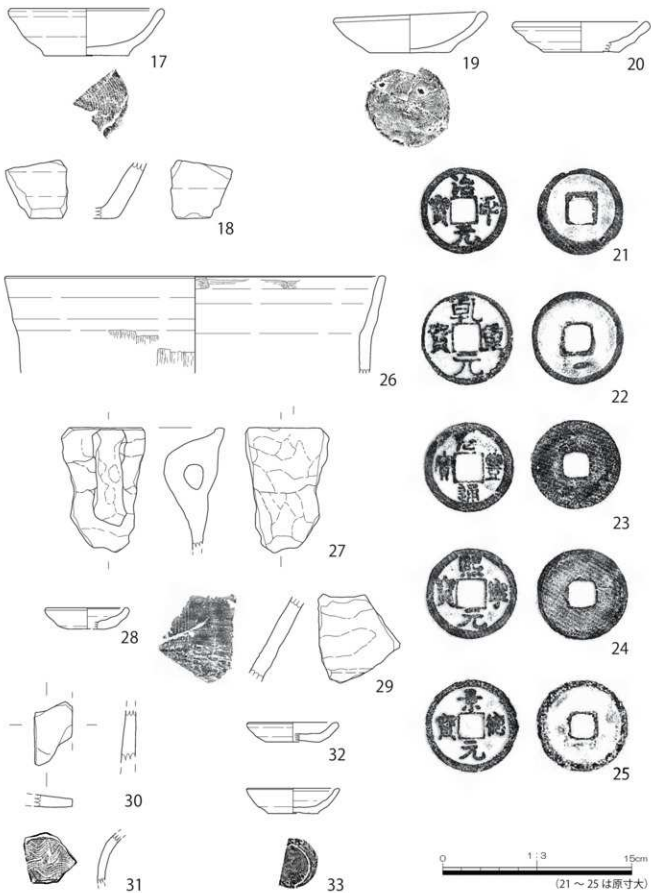
その他注目すべき点は、今回のように限定された範囲の中でも荒川の流路の変動や氾濫の影響により地形・堆積状況が大きく異なっていることである。幅約4m、長さ約30mの範囲にも関わらず、北と南では地山の状況を含め堆積状況が異なり、安定した堆積状況が見られる北側の調査区で多くの遺構が検出されている。

今回の調査区は榎田遺跡の南端と考えられ、遺跡の中心部は平成4年に山梨県埋蔵文化財センターが行った調査地点付近で南側は遺構が薄いと考えられている。今回の調査結果から推測すれば、荒川の氾濫の影響や南東に傾斜している地形が大きく作用していると思われるが、遺構は存在していたものの自然環境により喪失したのか、元来無かったのか今後の調査によりその全貌が明らかになるとと思われる。

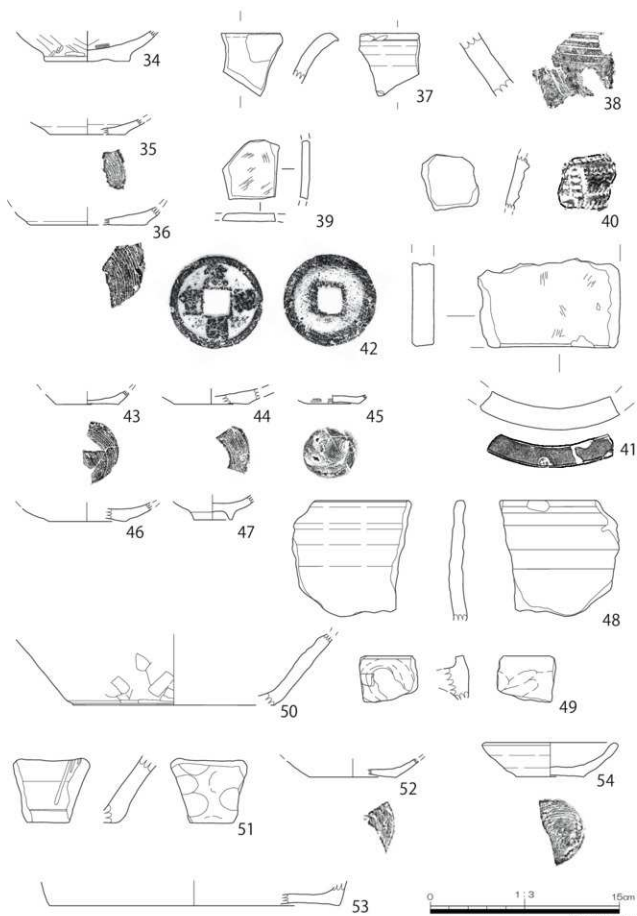




第 33 图 遗物实测图 (1)



第 34 図 遺物実測図 (2)



第35図 遺物実測図(3)



表6 遺物観察表(2)

検出 番号	調査 区	調査 区	出土地点 記号(1) M1	種別	規模	法量 (cm)		部位	説明	色調		胎土	組成	備考	
						長さ	高さ			内面	外面				
19		Ⅲ	S88	上蓋	円形5弁	11.8	6.5	口縁部(1/4 X) ～底面	底面からやや内側にかけて立ち上りの円形。縁部はやや外側に開きながら変化する。体面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	5YR6/6青	5Y7/6青	黒石・赤土・金雲 良好	中国産。滑石質(以上)。 IIC。		
20		Ⅲ	S88	一拵	円形5弁	10.3	6.0	口縁部～底面	口縁部から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	5YR6/6青	5YR6/6青	黒石・赤土・金雲 良好	IIC。		
21		Ⅲ	S88	2弁	2弁	2.3		底面～底面	底面から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。					104号初期、正文	
22		Ⅲ	S88	2弁	2弁	2.4		底面～底面	底面から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。					758号初期、非	
23		Ⅲ	S88	2弁	2弁	2.3		底面～底面	底面から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。					1078号初期、正文	
24		Ⅲ	S88	2弁	2弁	2.4		底面～底面	底面から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。					1004号初期、正文	
25		Ⅲ	S88	2弁	2弁	2.4		底面～底面	底面から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。					1004号初期、正文	
26		Ⅲ	S810	P1+3 高直上蓋	円形上蓋	15.4		口縁部～体部	体部から直線的に外に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	5YR5/1黒青	5YR4/6赤黄	黒石	良好	15 ⅢB中層～後層	
27		Ⅲ	S810	2弁上蓋	円形上蓋			口縁部、41部	ナナ	5YR5/1黒青	5YR4/4に赤い 点斑	黒石・赤土・金雲 良好	良好	15 ⅢB中層～後層	
28		Ⅲ	S814	2弁	円形5弁	6.3	5.0	口縁部～底面	ナナ調。底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	2.5YR5/4に赤 い斑	2.5YR5/4に赤 い斑	黒石・赤土・金雲 良好	良好	IIC	
29		Ⅲ	S814	P1 上蓋	上蓋			体部	ナナ	5YR5/1黒青	5YR5/1黒青	黒石	良好		
30		Ⅲ	S814	P4 白磁器	瓶	5.0	3.0		一方の端に浅く凹んだ縁部有。	10YR5/2灰青					法量は法定、瓶、薄み
31		Ⅲ	S816	P1 赤瓦上蓋	蓋			口縁部～体部	縁部転写なし	10YR5/1黒青	7.5YR6/4に赤 い斑	黒石・赤土・金雲 良好	良好		
32		Ⅲ	S84	P1 上蓋	円形5弁	6.0	4.1	口縁部～底面	ローロナナ、底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	7.5YR6/4に赤 い斑	7.5YR6/4に赤 い斑	黒石・赤土・金雲 良好	良好	IIC	
33		Ⅲ	S817	一拵	円形5弁	17.2	14.0	口縁部～底面	ローロナナ、底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	7.5YR6/4に赤 い斑	7.5YR6/4に赤 い斑	黒石	良好	IIC	
34		Ⅲ	遺物外	一拵	上蓋		6.0	体部～底面	ミガキ、底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	5YR6/6青	5YR6/6青	黒石・赤土・金雲 良好	良好		
35		Ⅲ	遺物外	一拵	上蓋		6.0	口縁部～底面	ヘラナナ調。底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	7.5YR6/6青 点斑	7.5YR6/6青 点斑	黒石・赤土・金雲 良好	良好		
36		Ⅲ	遺物外	一拵	上蓋		6.0	口縁部～底面	底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	7.5YR7/6青	7.5YR7/6青	黒石・赤土・金雲 良好	良好		
37		Ⅲ	遺物外	P3 上蓋	蓋			体部	口縁部を内側に開く。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	7.5YR6/4に赤 い斑	7.5YR6/4に赤 い斑	黒石・赤土・金雲 良好	良好		
38		Ⅲ	遺物外	一拵	上蓋			体部	法線	5YR6/8青	5YR6/8青	黒石	良好		
39		Ⅲ	遺物外	一拵	高直上蓋	瓶	14.7	14.3	一方の端に浅く凹んだ縁部有。	7.5YR4/1黒灰	7.5YR4/1黒灰	黒石	良好	法量は法定、瓶、薄み	
40		Ⅲ	遺物外	一拵	蓋			口縁部	縁部の一部が底面に転写される。口縁部は大きく、底面に転写される。底面に大きな縦線、ローロナナ、縦筋の転写が認められる。	5YR5/6青赤黄	5YR5/6青赤黄	黒石・赤土・金雲 良好	良好	ⅢB中層	

表7 遺物観察表 (3)

種類 番号	調査 式	出土地点 (方格)	種別	図種	法頭 (mm.) L 法頭 W 法頭 H 法頭 D 法頭 E 法頭 F 法頭 G 法頭 I 法頭 J 法頭 K 法頭 L 法頭 M 法頭 N 法頭 O 法頭 P 法頭 Q 法頭 R 法頭 S 法頭 T 法頭 U 法頭 V 法頭 W 法頭 X 法頭 Y 法頭 Z 法頭	部位	形状・測定の種類		色調		敷土	組成	備考
							外装	内装	外装	内装			
41	II	遺跡外	一括	瓦	47.1	底面	底面に凹凸がある。底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
42	III	遺跡外	一括	瓦	2.4	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
43	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
44	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
45	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
46	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
47	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
48	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
49	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
50	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
51	III	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
52	IV	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
53	IV	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。
54	IV	遺跡外	一括	土器	49.5	底面	底面に凹凸がある。	内装	底面に凹凸がある。	底面に凹凸がある。	底	底	底面に凹凸がある。

## 引用・参考文献

- 森原明廣 1993「山梨県地域における内耳土器の系譜」『研究紀要9』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター  
降矢哲男・佐々木満・山下孝司「山梨県内における中世の土器様相について ―土師器皿を中心にして―」『中世土器研究論集  
―中世土器研究会 20周年記念論集―』
- 小林健二 2010「古墳時代における甲斐の地域社会 ―土器編年と墳墓の変遷―」『山梨県考古学協会誌 第19号』
- 小林健二 2015「甲斐の古墳時代と土器 ―編年と移動を考える―」『山梨県考古学協会誌 第23号』
- 佐々木満 2011「甲斐国における中世後半の土器様相 ―鉢・甕を中心に―」『山梨県考古学協会誌 第20号』
- 山梨県教育委員会 1995『榎田遺跡 ―ツリータウン千塚団地建設に伴う発掘調査報告書―』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第105集）
- 山梨県教育委員会 1997『音羽遺跡 ―音羽県職員宿舍建て替えに伴う発掘調査報告書（第1・2・3次調査―）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第125集）
- 甲府市教育委員会 2006『甲府市内遺跡Ⅲ ―平成7・8年度試掘調査報告書―』（甲府市文化財調査報告31）
- 甲府市教育委員会 2007『甲府市内遺跡Ⅳ ―平成9～10年度試掘調査報告書―』（甲府市文化財調査報告35）
- 甲府市教育委員会 2008『甲府市内遺跡Ⅴ ―平成11～12年度試掘調査報告書―』（甲府市文化財調査報告38）
- 甲府市教育委員会 2009『甲府市内遺跡Ⅵ ―平成13～14年度試掘調査報告書―』（甲府市文化財調査報告41）
- 甲府市教育委員会 2011『甲府市内遺跡Ⅶ ―平成17～18年度試掘調査報告書―』（甲府市文化財調査報告59）
- 甲府市教育委員会 2013『甲府市内遺跡Ⅷ ―平成19～20年度試掘調査報告書―』（甲府市文化財調査報告63）
- 山梨県中北建設事務所 甲府市教育委員会 公営財団法人山梨文化財研究所 2016『榎田遺跡―都市計画道路高畑町昇仙峡線  
街路事業に伴う甲府市千塚4丁目3048-9他及び千塚5丁目3046-1地点の発掘調査―』

## 第8章 自然科学分析

### 第1節 榎田遺跡から出土した哺乳類遺体

中村 賢太郎（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

榎田遺跡の発掘調査では土坑であるSK8から人骨が、溝であるSD5から獣骨が出土した。ここではこれら哺乳類遺体の同定結果を報告する。

#### 2. 試料と方法

試料は、SK8から出土した人骨とSD5から出土した獣骨である。遺構の時期はいずれも中世（15～16世紀）と考えられている。

試料は周囲の土ごとに取り上げられていたため、まず周囲の土を除去した。その際、骨が脆くなり形状を保つのが難しい場合には、バラロイド B72 により骨を強化した。

特徴の観察や同定は肉眼で行った。

#### 3. 結果

SK8の骨はヒトと同定された。いずれの部位も遺存状態は悪い。同定された部位は、頭蓋骨、下顎骨、右上顎中切歯、右上顎側切歯、右上顎犬歯、右上顎第1小白歯、左右不明下顎中切歯、四肢骨破片である。頭蓋骨は、前頭骨、頭頂骨、後頭骨、右側頭骨が残る。上顎骨や左側頭骨は確認できない。出土時には右側頭部を下に向けた状態であった。ラムダ縫合は未癒合である。上顎の歯について述べると、右上顎中切歯と右上顎側切歯の咬耗は進んでいない。右上顎犬歯は、咬耗が著しく進み、象牙質が露出している。右上顎第1小白歯は咬耗が進み、頬側の咬頭は象牙質が露出、舌側の咬頭は象牙質がわずかに露出している。

下顎骨は右のみ、下顎枝および下顎体の遠心側が残る。下顎骨全体はややきしゃに見える。歯は脱落し、歯槽も破損しており、歯の萌出状態は詳細不明である。下顎骨から遊離したと見られる左右不明の下顎中切歯は、咬耗がやや進み、象牙質がわずかに露出している。

その他、SK8では、ヒト四肢骨の骨幹破片が1点見られた。

SD5の獣骨は状態が極めて悪い。骨（北）はおそらく哺乳綱の頭蓋骨と見られる。骨（南）もおそらく哺乳綱であるが、部位不明である。

#### 4. 考察

SK8のヒトは、部位の重複がなく、1体分と考えられる。頭部以外に四肢骨の破片も見られるため、元々は全身が存在した可能性が考えられる。歯の咬耗が見られるため成人であると考えられ、ラムダ縫合が未癒合である点から老年には達していないと考えられる。性別については、下顎骨がややきしゃに見えるものの、判断はできない。

SD5の骨は哺乳綱と見られるが、状態が極めて悪く、詳細不明である。



## 参考文献

馬場悠男編（1998）考古学と自然科学①考古学と人類学，191p，同成社。

原島広至（2007）骨単 MAP & 3D，エヌ・ティー・エス。



図版 1 SK8 から出土した人骨 1. 頭蓋骨 2. 右下顎骨 3. 遊離歯 4. 四肢骨破片

## 第2節 榎田遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）および炭素・窒素安定同位体分析

（株）加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

山梨県に所在する榎田遺跡の測定対象試料は、馬の歯1点である（表1）。

### 2 年代測定試料の化学処理工程

- （1）骨・歯試料はコラーゲン抽出（Collagen Extraction）を行う（表1に「CoEx」と記載する）。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土等の付着物を取り除く。試料をピーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。
- （2）0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったピーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。得られたコラーゲンを2つに分け、一方を年代測定用、他方を安定同位体分析用の試料とする。
- （3）抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- （4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- （5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- （6）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 3 年代測定試料の測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOX II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 炭素・窒素安定同位体比及び含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

2 (2) の工程で、コラーゲンを得る。

(3) 抽出したコラーゲンを EA (元素分析装置) で燃焼し、N<sub>2</sub> と CO<sub>2</sub> を分離・定量する (表 3)。

(4) 分離した N<sub>2</sub> と CO<sub>2</sub> は、インターフェースを通して質量分析計に導入し、炭素の安定同位体比 ( $\delta$  13C) と窒素の安定同位体比 ( $\delta$  15N) を測定する (表 3)。

これらの処理、測定には、元素分析計-安定同位体比質量分析計システム (EA-IRMS: Thermo Fisher Scientific 社製 Flash EA1112- DELTA V PLUS Conflo III System) を使用する。 $\delta$  13C の測定では IAEA の C6 を、 $\delta$  15N の測定では N1 を標準試料とする。

### 5 算出方法

(1)  $\delta$  13C は、試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料 (PDB) からのずれを示した値である。 $\delta$  15N は、試料窒素の 15N 濃度 (15N/14N) を測定し、基準試料 (大気中の窒素ガス) からのずれを示した値である。いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。 $\delta$  13C は AMS 装置と質量分析計で測定され、AMS 装置による値は表中に (AMS) と注記し (表 1)、質量分析計による値は表中に (MASS) と注記する (表 3)。 $\delta$  15N は質量分析計による値で、表中に (MASS) と注記する (表 3)。

(2) 14C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。14C 年代は  $\delta$  13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。14C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい (14C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (14C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta$  13C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta$  13C 補正を行い、下 1 桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を使い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、

プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

試料の測定結果を表1～3に示す。

試料の14C年代は $80 \pm 20$ yrBP、暦年較正年代(1 $\sigma$ )は1699～1916cal ADの範囲で示される。なお、この較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表2下の警告参照)。

次に試料の安定同位体比については、 $\delta^{13}C$ が-19.6%、 $\delta^{15}N$ が4.48%となっている。この結果について、日本列島における食性分析の成果を参照して検討する。今回測定された試料の値を日本列島の生物に関するデータと比較したグラフをYoneda et al. 2004に基づいて作成し、[参考]として文末に示した。

グラフによると、今回測定された試料の $\delta^{13}C$ はC3植物や陸生哺乳類の範囲に含まれる。 $\delta^{15}N$ はC3植物、C4植物の範囲内で、陸生哺乳類より若干低い値である。試料は馬の歯とされており、おおむね整合的な結果と見られる。

試料の保存状態について検討すると、コラーゲン回収率(=コラーゲン量/処理した試料量)は4.2%で、特に問題ないと見られる。また、炭素と窒素の含有量は骨・歯コラーゲンとして適正な値である(van Klinken 1999)。C/N比は現生動物骨と同程度と見なされる(DeNiro 1985、Hare and von Endt 1990)。以上のことから、今回の測定結果は試料となったコラーゲンの本来の特徴を問題なく示していると判断される。

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- DeNiro, M.J. 1985 Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction, *Nature* 317, 806-809
- Hare, P. E. and von Endt, D. 1990 Variable preservation of organic matter in fossil bone, Annual Report of Director of the Geophysical Laboratory, Carnegie Institution, Washington, 1989-1990, Geophysical Laboratory, Washington D.C., 115-118
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- van Klinken, G.J. 1999 Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements, *Journal of Archaeological Science*, 26, 687-695
- Yoneda, M. et al. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan, *Journal of Archaeological Science*, 31, 97-107

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-160763	SD4 No.23	榎田遺跡 SD4 No.23	馬の歯	CoEx	-22.83 ± 0.55	80 ± 20	98.97 ± 0.29

[#8131]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-160763	50 ± 20	99.41 ± 0.27	83 ± 23	1699calAD - 1721calAD (19.5%) <sup>a</sup> 1818calAD - 1833calAD (13.2%) <sup>a</sup> 1880calAD - 1916calAD (35.5%) <sup>a</sup>	1692calAD - 1729calAD (25.3%) <sup>a</sup> 1811calAD - 1920calAD (70.1%) <sup>a</sup>

[参考値]

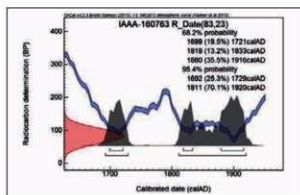
\* Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラム OxCal が発するもので、試料の  $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

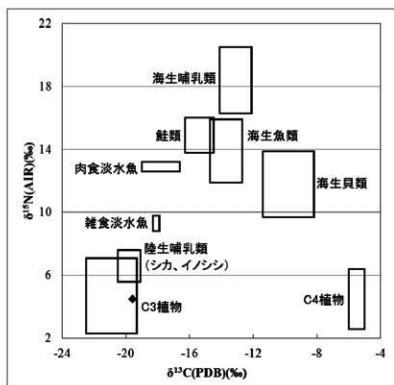
表3 炭素・窒素安定同位体比及び含有量

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
SD4 No.23	-19.6	4.48	42.7	15.4	2.8	3.2

注) 表3に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は、昭光サイエンス株式会社の協力を得て行った。



[図版 1] 暦年較正年代グラフ (参考)



[図版 2] 炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)

◆は測定試料。

散布図上に表示した枠は、生物の同位体比の分布範囲を食物から骨コラーゲンへの濃縮を考慮して示した Yoneda et al. 2004 に基づき作成した。



[図版 3] 試料写真



写真図版







1. I区全景 (南から)



2. II区全景 (北から)



3. III区全景 (北東から)



4. IV区全景 (南から)



5. I区東壁（北西から）



6. I区西壁（南東から）



7. II区東壁北側（西から）



8. II区東壁南側（西から）



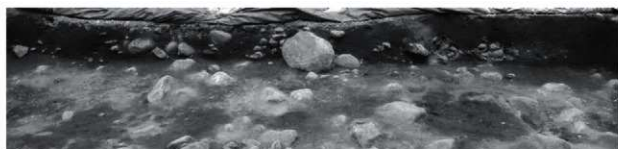
9. II区西壁北側下層（東から）



10. II区西壁南側（東から）



11. III区北壁（南から）



12. III区東壁（西から）



13. III区西壁（東から）



14. IV区東壁（西から）



15. IV区西壁（東から）



16. 1号竪穴状遺構南壁セクション（南から）



17. 1号竪穴状遺構・16号土坑（東から）



18. 1号竪穴状遺構遺物出土状況1（南東から）



19. 1号竪穴状遺構遺物出土状況2（西から）



20. 2号竪穴状遺構検出状況（西から）



21. 2号竪穴状遺構北壁セクション（北から）



22. 2号竪穴状遺構東壁セクション（東から）



23. 2号竪穴状遺構（西から）



24. 1号溝状遺構東壁セクション（南西から）



25. 1号溝状遺構ベルトセクション（南西から）



26. 1号溝状遺構（南から）





27. 4号溝状遺構東壁セクション1 (南西から)



28. 4号溝状遺構東壁セクション2 (西から)



29. 4号溝状遺構南側ベルトセクション(北東から)



30. 5号溝状遺構南壁セクション (南から)



31. 4号溝状遺構上層遺物出土状況 (南西から)



32. 4号溝状遺構馬歯出土状況(攪乱) (東から)

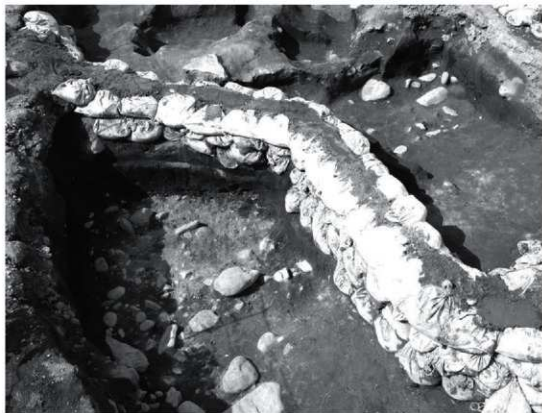


33. 4号溝状遺構遺物出土状況1 (西から)





34. 4号溝状遺構土器遺物出土状況2 (南西から)



35. 4・5号溝状遺構 (南西から)



36. 4号溝状遺構（南東から）



37. 4号溝状遺構南側（西から）



38. 1号土坑東ベルト西壁セクション（西から）



39. 1号土坑西壁セクション（東から）



40. 4号土坑セクション（北から）



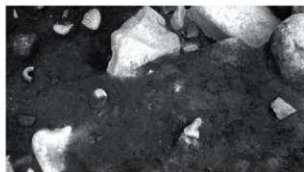
41. 4号土坑土器出土状況（北から）



42. 4号土坑（南東から）



43. 8号土坑セクション（南東から）



44. 9号土坑周辺遺物出土状況（西から）



45. 10号土坑遺物出土状況（東から）



46. 8号土坑人骨・土器・銭出土状況1（南西から）



47. 8号土坑人骨・土器・銭出土状況2（拡大）（南西から）



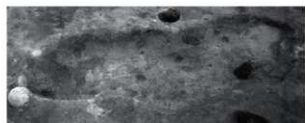
48. 8号土坑人骨・土器・銭出土状況3（北東から）



49. 12号土坑（南から）



50. 13号土坑セクション（南東から）



51. 13号土坑（北西から）



52. 14号土坑（北東から）



53. 1号ビットセクション (西から)



54. 1号ビット (西から)



55. 4号ビットセクション (南から)



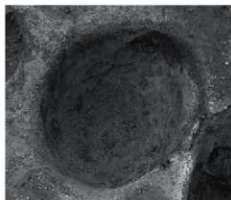
56. 7号ビットセクション (南から)



57. 11号ビットセクション (東から)



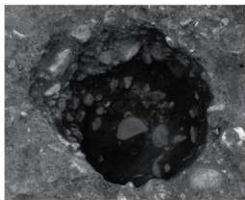
58. 25号ビットセクション (西から)



59. 25号ビット (南から)



60. 34・35号ビットセクション (東から)



61. 64号ピット (南から)



62. 68号ピット (北から)



63. 70号ピット (東から)



64. 77号ピット (東から)



65. 78号ピット (南から)



66. 79号ピット (北から)



67. 80号ピット (北から)



68. 83号ピット (南から)





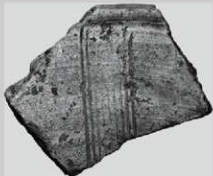
1



4



5



2



6



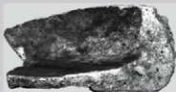
7



3



8



9



11



10

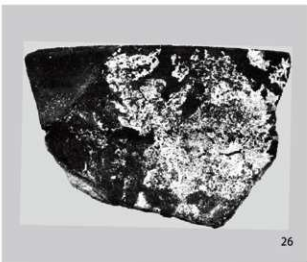
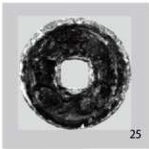
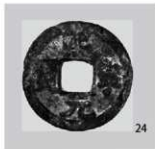
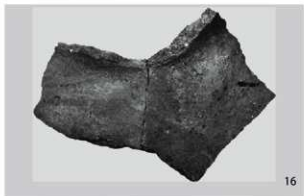


12



13







## 報告書抄録

フリガナ	エノキダイセキ（コウフシチツカ4チョウメ3256-1ホカチデン）							
書名	榎田遺跡（甲府市千塚4丁目3256-1他地点）							
副書名	一都市計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名	甲府市文化財調査報告							
シリーズ番号	91							
編著者名	平塚洋一（甲府市教育委員会）・小谷亮二・萩野谷主税（昭和測量株式会社）							
編集機関	昭和測量株式会社							
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3-11-27 Ⅱ 055-235-4448							
発行年月日	西暦 2016（平成28）年12月22日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
エノキダイセキ 榎田遺跡 コウフシチツカ4 3256-1ホカチデン 3256-1他地点	ヤマブシケン 山梨県 コウフシチツカ4 甲府市千塚4丁目 3256-1ホカチデン 3256-1他地点	19201	17	35° 41' 03"	138° 32' 18"	20150610～20150807	132	道路拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
榎田遺跡 (甲府市千塚4丁目 3256-1他地点)	集落	古墳時代	方形周溝墓の溝	土師器		土師器の特徴から古墳時代前期と思われる。		
		中世	竪穴状遺構2基、溝跡5条、土坑17基、ピット85基	かわらけ、内耳土器、摺鉢、摺鉢、土塚墓が出土され人骨、かわらけ、中国銭が出土した。16世紀代に属すると思われる。				

甲府市文化財調査報告 91

---

**榎田遺跡 (甲府市千塚4丁目3256-1他地点)**

—都市計画道路高畑町昇仙峡線街路事業に伴う発掘調査報告書—

発行日 平成 28 年 12 月 22 日  
編集 昭和測量株式会社  
〒 400-0032 山梨県甲府市中央三丁目-11-27 ℡ 055-235-4448  
発行 山梨県中北建設事務所  
〒 400-0065 山梨県甲府市貢川二丁目 1-8 ℡ 055-224-1660  
甲府市教育委員会  
〒 400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18 番 1 号 ℡ 055-223-7324  
昭和測量株式会社  
〒 400-0032 山梨県甲府市中央三丁目-11-27 ℡ 055-235-4448  
印刷・製本 株式会社 内田印刷所  
〒 400-0032 山梨県甲府市中央二丁目-10-18 ℡ 055-233-0188

---